

愛媛県松前町楠木遺跡発掘調査報告書

平成10年（1998）6月

愛媛県伊予郡松前町教育委員会

序 文

松前町は、美しい伊予灘に面し、豊かな緑に囲まれた古い歴史と伝統を誇る町です。

この報告書は、伊予郡松前町出作地区（松山平野の古代社会を解明する上で重要な拠点であろうと思われます。）において、店舗建設事業に伴い、当該地域内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を松前町教育委員会が実施した報告書であります。

今回の調査は、梅雨時期に当たり、雨の日が多いにもかかわらず短期間で無事終了いたしました。ここに発掘調査員として指揮をとられた愛媛考古学研究所・長井数秋氏、その補助並びに作業に当たられた皆様方に、心から感謝申し上げます。

なお、本報告書が、埋蔵文化財の保護、また教育文化の向上に幅広く御活用いただければ幸いに存じます。

平成10年6月

松前町教育委員会
教育長 西村 溫一郎

例　　言

- 1 本報告書は、愛媛県伊予郡松前町大字出作字楠木540番地に所在した楠木 (Kusunoki) 遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は松前町教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査期間は平成9(1997)年5月21日から6月6日までであり、遺物整理並びに報告書作成は平成9年6月20日から11月20日までの間に行った。
- 4 発掘現場での測量は西岡信次、西岡若水と長井数秋が、写真撮影は長井が行った。
- 5 遺物の整理は西岡若水が、写真は長井が行った。
- 6 報告書の執筆と編集はともに長井が担当した。
- 7 発掘調査は下記の組織で実施した。

調査担当者 長井 敦秋 (日本考古学协会会员・愛媛考古学研究所)

調査員 西岡 信次 (松山聖陵高等学校教諭)

調査補助員 宮内 一信

重松 勇

眞田 熊雄

二宮ミツコ

事務局 西村温一郎 (松前町教育委員会教育長)

井上妙一朗 (松前町教育委員会社会教育課長)

吉田 健勝 (松前町教育委員会社会教育課長補佐)

山本 有三 (松前町教育委員会社会教育課生涯学習係長)

中矢 善樹 (松前町教育委員会社会教育課生涯学習係主任)

本文目次

Iはじめに	1
1 遺跡の呼称について	1
2 発掘調査にいたる経緯	1
3 発掘調査の経過	1
II遺跡周辺の環境	3
1 遺跡周辺の自然環境	3
(1) 遺跡の位置	3
(2) 遺跡周辺の地質と地形	3
2 遺跡周辺の歴史環境	4
III調査結果	7
[1] 調査の概要	7
[2] 堆積層序	7
[3] 検出した遺構並びに出土遺物	7
1. 1号土坑と出土遺物	7
(1) 1号土坑	7
(2) 出土遺物	11
①土師器	11
②鉄剣	11
2. 2号土坑と出土遺物	12
(1) 2号土坑	12
3. 3号土坑と出土遺物	12
(1) 3号土坑	12
(2) 出土遺物	13
①土師器	13
②磁器	13
4. 4号土坑	13
5. 5号土坑と出土遺物	14
(1) 5号土坑	14
(2) 出土遺物	14
①土師器	15
6. 1号土器群	16
7. 木杭列	16
8. 柱穴群の概要	16
(1) 二段掘り柱穴	16
(2) 遺物を伴う柱穴	17
①土師器出土の柱穴	17
②須恵器出土の柱穴	17
③弥生土器片出土の柱穴	17

④瓦器出土の柱穴	17
⑤備前焼甕片出土の柱穴	17
⑥磁器出土の柱穴	18
⑦川石（山石）出土の柱穴	18
9. 柱穴	18
10. 柱穴中出土の遺物	22
11. 掘立柱建造物	32
(1) 1号掘立柱建造物	32
(2) 2号掘立柱建造物	33
(3) 3号掘立柱建造物	33
(4) 4号掘立柱建造物	33
(5) 5号掘立柱建造物	34
(6) 6号掘立柱建造物	34
(7) 7号掘立柱建造物	34
(8) 8号掘立柱建造物	35
(9) 9号掘立柱建造物	35
(10) 10号掘立柱建造物	35
(11) 11号掘立柱建造物	35
(12) 12号掘立柱建造物	35
(13) 13号掘立柱建造物	39
12. 柱穴列（横列）遺構	39
(1) 1号柱穴列	39
(2) 2号柱穴列	39
(3) 3号柱穴列	39
(4) 4号柱穴列	39
IV 総括	40

図 目 次

第1図 松前町の位置	3
第2図 遺跡の位置	4
第3図 遺跡付近の地形と主要遺跡分布	5
第4図 発掘地区の関係位置	6
第5図 楠木遺跡の平・断面図	9
第6図 1号土坑平・断面図	11
第7図 1号土坑出土の土師器と鉄劍	12

第8図	2号土坑平・断面図	13
第9図	3号土坑平・断面図	13
第10図	3号土坑出土の土師器	14
第11図	4号土坑平・断面図	14
第12図	5号土坑平・断面図	15
第13図	5号土坑出土の土師器とP38出土の須恵器	15
第14図	1号土器群出土の土師器	16
第15図	P32平・断面図	19
第16図	P33平・断面図	19
第17図	P58平・断面図	20
第18図	P62平・断面図	20
第19図	P92平・断面図	21
第20図	P105平・断面図	22
第21図	P1(柱穴番号1)内出土の土師器	22
第22図	P7~P39中出土の土師器・弥生土器	24
第23図	P43~P76出土の土師器・弥生土器	27
第24図	P58出土の大型石錐	28
第25図	P69出土の備前焼甕拓影	28
第26図	P76~P92出土の土師器・須恵器	29
第27図	P92~P93出土の土師器	30
第28図	P94~P114出土の土師器・須恵器・瓦器・石器	31
第29図	P105~P114出土の弥生土器・土師器	33
第30図	2層上面出土の土師器	34
第31図	掘立柱建造物群と柱穴列遺構と土器出土の柱穴	37

表 目 次

第1表	検出した柱穴計測値一覧表	43
第2表	楠木遺跡出土遺物一覧表	46

図 版 目 次

図版 1	53
図版 2	54
図版 3	55
図版 4	56
図版 5	57
図版 6	58
図版 7	59
図版 8	60
図版 9	61
図版10	62
図版11	63
図版12	64
図版13	65
図版14	66
図版15	67
図版16	68
図版17	69
図版18	70
図版19	71
図版20	72
図版21	73
報告書抄録	75

愛媛県松前町楠木遺跡発掘調査報告書

I はじめに

1 遺跡の呼称について

松前町大字出作には現在までに確認されている周知の遺跡が4遺跡所在する。本遺跡の東約200mには古墳時代中期の祭祀遺跡である出作遺跡¹⁾があり、南南東約300mには弥生後期の出作南遺跡が分布している。本遺跡の西約100mには有柄式磨製石剣が出土したり、文石墓が確認されている弥生前期の宝剣田遺跡²⁾がある。本遺跡はさしづめ出作遺跡と宝剣田遺跡の中間に位置しているといえる。本遺跡は小字名が楠木であるため、小字名をとって楠木遺跡と呼称したい。

なお、試掘確認調査の際の仮の遺跡名も、楠木遺跡としている。

2 発掘調査にいたる経緯

平成8年2月、高瀬医院の西100mの楠木536番地の宝剣田遺跡の水田を、駐車場にする話がもちあがった。そのため、松前町教育委員会はこの地で試掘による遺跡の確認調査を実施した。その結果、弥生前期の支石墓や溝状造構などが確認され、駐車場建設の話は中止となった。

その後、平成8年8月になって、高瀬医院の東の県道に接する540-1番地を、駐車場にする話がもちあがった。そこで、松前町教育委員会は、該当地が岡作遺跡と宝剣田遺跡の中間地点にあることから、試掘による埋蔵文化財確認調査を実施した。その結果、540-1番地のうちの南半分に、中世のものとみられる柱穴を伴う遺構のあることが判明した。そのため、駐車場建設の話は沙汰やみとなった。しかし、平成9年5月になって再び駐車場建設の計画が浮上したため、急速発掘調査を実施することになった。したがって、本発掘はまさに緊急発掘そのものといえる。

3 発掘調査の経過

5月12日（月） 松前町教育委員会と発掘調査担当者との第1回目の話し合い。

19日（月） 松前町教育委員会と発掘調査担当者との第2回目の話し合い。5月21日（水）から発掘調査に着手することを決める。

21日（水）晴れ

バックフォーのオペレーターと表土除去について打ち合わせ。試掘の際の確認調査の堆積層序に従って表土の除去を行う。表土除去は午前中に終了する。続いて表土層の残部と水田床土の除去を行う。発掘地K東部の水田床土面下で柱穴群を検出する。

22日（木）晴れ

午前中、1A区・2A区の水田床土を除去し、第2層上面の検出を行う。1

A区・2A区から柱穴を数個検出。柱穴中から炭と土師器片が出土。午後から3A区と3B区の西部を北側境界線まで発掘する。3A区では第2層上面の柱穴上から厚手の須恵器出土。須恵器は一見、出作出土の須恵器に類似。

23日（金）晴れ

午前中、3B区の西部から発掘する。午後から3C区と3B区の柱穴群の発掘を開始。3B区の柱穴の発掘をほぼ終了する。3C区のP102中の遺物のうち、青磁が柱穴上部から、土師器は底部から重なった状態で出土。2C区P53中の-17cmから、土師器の碗の完形品が出土。3C区P104中の底部に柱の一部が遺存していた。

24日（土）晴れのち雨

午前中、3B区の柱穴の掘り残し部分を発掘。並行して2D区と2C区の北部の柱穴群の発掘を実施。午前中、長井・西岡班は3C区・3D区・3B区の北部の柱穴群の平面測量を実施する。これは隔壁工事を行うためである。

29日（木）晴れのち曇り、午後遅く雨

3B区と3C区の北部の柱穴群の清掃、のち写真撮影。遺物の取り上げを行う。続いて1C区・1D区の柱穴群の検出を行う。

30日（金）曇りのち晴れ

2C区の柱穴群と2C区西部から2B区にかかる川石からなる長方形の集石遺構とみられるものの検出を行う。午後より3A区南部と2A区での遺構の検出。3A区の柱穴内から須恵器片出土。大きな破片は法面下5cmからの出土であり、柱穴に伴うものとみてよからう。

31日（土）晴れ

2A区での柱穴の検出。続いて2B区の遺構の検出に努める。並行して2C区の遺構の検出。2C区の北隅の川石からなる集石の上面や石組中より、新しい瓦や陶器、磁器、窯道具等が出土。

午後、旧土地所有者から発掘地区の過去の土地利用を聞く。その結果、安政4年に壁土用の粘土をこの水田より採取したことが記録に残っており、旧土地所有者自身も昭和になって屋根葺用と壁土用に粘土を採取したことである。長方形の大きな二つの集石遺構は、粘土採取地跡を川石で充填した跡であることが判明した。

6月2日（月）曇り

2B区の遺構の検出を続行。P91では上部から土師器片が、底部近くから柱の炭化したものが出土した。火災による消失を想定できる資料であるかもしれない。1A区の未発掘であった柱穴の発掘を行う。土坑の平・断面測量と写真撮影。のち遺物の取り上げ。

3日（火）曇り

柱穴群の再点検を行う。掘り残しが認められ、これに終日費やす。午後、松前町文化財保護審議会の委員の現地見学。

4日(水) 曇り時々小雨、のち晴れ

テントや発掘資材を搬出し、発掘地区全体の清掃を行う。のち、遺跡全体の写真撮影。部分的な写真撮影も行う。午後より2B区の平面測量を実施しはば終了する。

5日(木) 晴れ

2A区・2D区・1B区・1C区・1D区の遺構群の平面測量を行う。午後遅く断面測量の準備。教育委員会による資材の搬送。

6日(金) 晴れ

遺跡全体の断面測量を行う。本日で現場の発掘調査を完了する。

II 遺跡周辺の環境

1 遺跡周辺の自然環境

(1) 遺跡の位置



第1図 松前町の位置

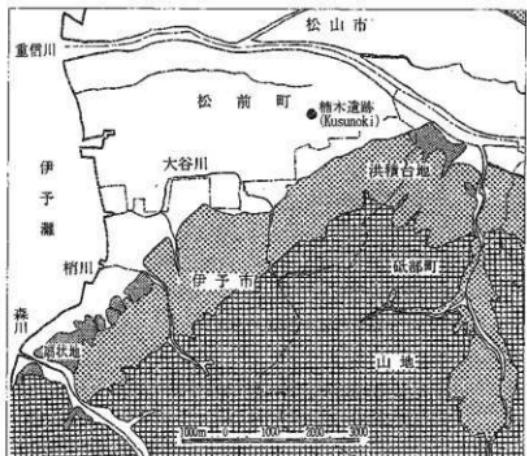
遺跡の絶対位置は、東経 $132^{\circ} 45' 13''$ 、北緯 $33^{\circ} 47' 14''$ の交差する周辺である。行政位置は、愛媛県伊予郡松前町大字出作字楠木450番地で、垂直位置は標高13mで、地目は水田である。JR予讃線北伊予駅の北約1km、県道松山～伊予線に面し、西瀬戸内海の伊予灘までの直線距離は約4kmである。

(2) 遺跡周辺の地質と地形

本遺跡の南約8kmには中央構造線がほぼ東西に走行しており、地体構造的には、これより以南を西南日本外帯、以北を西南日本内帯と呼んでいる。したがって、本遺跡を中心とする

松前町東部は西南日本内帯に属している。中央構造線の北部には谷上山(445m)から金松山(257m)にのびる和泉層群からなる小山塊が北東～南西方向に走行している。この和泉層群は和泉砂岩と頁岩の互層からなっているため、浸食を受けやすく、山麓下には古期扇状地が形成されている。

本遺跡を中心とする地域の基盤岩は和泉砂岩であるが、重信川の運搬・堆積作用により、上部には重信川上流の土砂が厚く堆積している。重信川は江戸時代初頭までは伊予川と呼ばれ、本遺跡の南約1kmを東から西に向かって流れている時期もあるし、遺跡の北200mを東から西に流れていた時期もあったようである。前者は古伊予川の支流であり、本流は後者であったことは間違



第2図 遺跡の位置

ない。本遺跡の所在する出作や徳丸、それに神崎地区は、さしすめ古伊予川の氾濫原に突出する低い台地状の地形であったものであろう。本遺跡周辺に堆積している土砂は、古伊予川が上流で浸食した土砂が堆積したものであり、その大半が和泉砂岩と頁岩の風化土であり、一部、砥部川の安山岩や緑泥片岩の風化土も含んでいる。ただし、遺跡周辺の堆積土はすべて粘土なし粘質土で、砂礫の堆積は認められない。

本遺跡の所在した水田の標高は13mで、水田そのものは水平

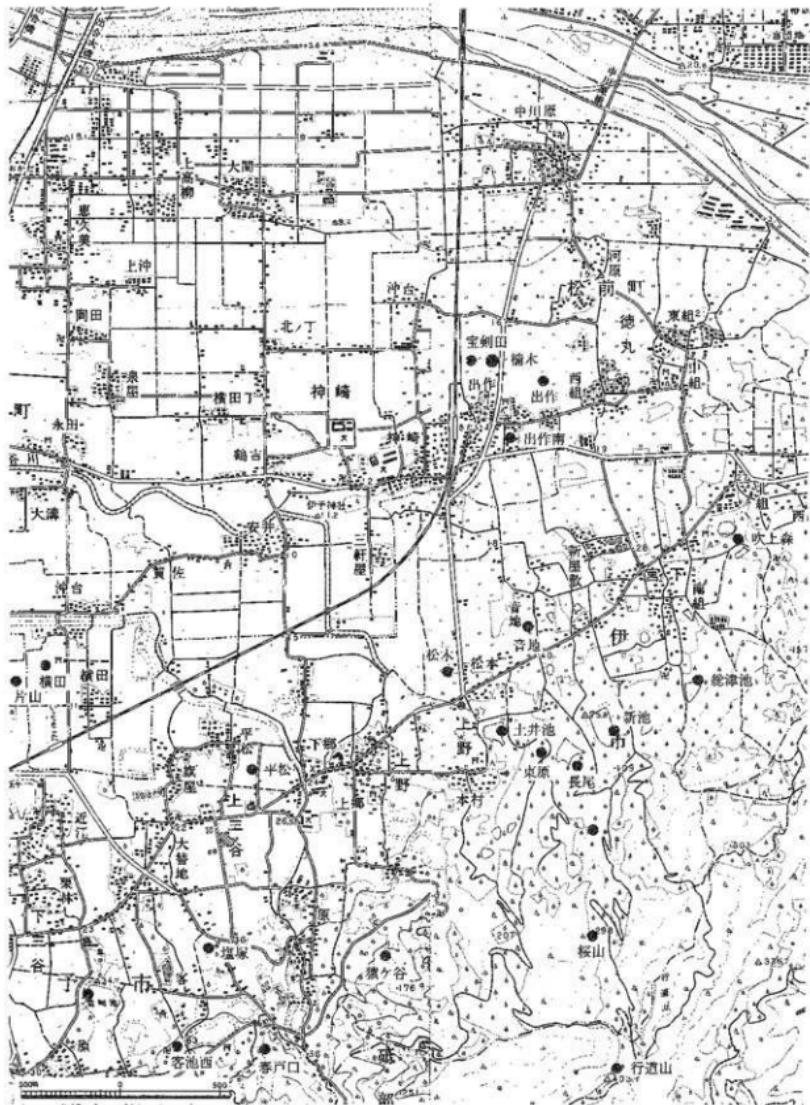
であり、周辺も平坦で、起伏は認められない。ただ、全体として東が高く、西に向かってわずかに傾斜しているが、水路の水の流れでかろうじてそれが分かるほどの傾斜である。

2 遺跡周辺の歴史環境

松前町内を中心とした遺跡についてのみ、簡単に説明を加えておきたい。

松前町内では旧石器時代の遺跡・遺物は現在までのところ未発見である。縄文時代になると横田遺跡から縄文中期の土器が、神崎から縄文後期の土器と石鎌が発見されているが、遺構等の調査は行われていない。弥生時代前期の遺跡は、横田遺跡と宝剣田遺跡が知られている。横田遺跡では住居址や溝状遺構、土坑等の遺構とともに多くの遺物も出土しているし、当時の人々の足跡も検出され、弥生前期前半であろうといわれている。宝剣田遺跡からは有柄式磨製石劍の出土が古くから知られているが、最近になって支石墓の存在が明らかとなり、有柄式磨製石劍も支石墓と密接な関係があるのでといわれている。有柄式磨製石劍は隣接する伊予市宮下東谷、同寺山や砥部町田浦遺跡³⁾からも発見され、そのいずれもが松山平野南部に集中しており、特異な方を示している。

弥生中期の明確な遺跡は確認されていないが、弥生中期末から後期にかけての遺跡は幾つか発見されている。その一つが神崎遺跡で、中期末から後期前半にかけての土器群がまとめて出土しているが、正式な調査は行われていない。その二は、発掘調査の行われた横田Ⅰ^④・Ⅱ^⑤遺跡である。横田Ⅰでは弥生後期末の小河川址と、それに伴う弥生土器が、横田Ⅱでは二つの河川址と井堰遺構、住居址等が明らかとなっている。特に河川址は床面に川砂利を敷き詰めたり、土器や石器を供獻して、河川祭祀を行っている。稻作用水に恵まれている底湿地の横田でさえも、この



第3回 遺跡付近の地形と主要遺跡分布

ような灌漑用水路が構築されていることは、弥生後期後半でも、いかに農業用水を確保することが重要視されていたかが理解できよう。これらについては、すでに発掘報告書が刊行されているので、詳細はそれに譲りたい。このほか、恵依彌二名神社の南の出作南遺跡⁶⁾では、大型の壺棺が出土している。

松前町内には山も台地もなく、すべての土地が沖積平野であるためか、今までのところ古墳は全く発見されていない。ただ、弥生後期末から古墳時代前期にかけての集落址が東古泉で確認されているし、中期になると大規模な祭祀遺跡である出作遺跡が、東約200mの地点に分布している。更に横田遺跡でも古墳時代後期の須恵器片がまとまって出土しており、隣接して古墳時代中期の子持勾玉⁷⁾も発見されている。このほか、神崎の伊予神社の西から古代寺院址の礎石が発見されていることから、この近辺に古代寺院が建立されていたことは間違いないだろう。松前町から伊予市にかけては、四国で最初に「伊余国造」が置かれたところであり、「伊豫二名島」や「伊予国」、「伊予評」、「伊予郡」、「伊予村」の地名の出自も、この地の名から興ったもの可能性が大で、伊予国の古代文化の発祥の地であることは間違いない。



第4図 発掘地区の関係位置

III 調査結果

[1] 調査の概要

調査地区は東西長13.5m、南北長13mのほぼ正方形で、面積は175m²であった。ただ、南部と西部、それに東部の境界線付近は、用水路等のコンクリート構築のため、幅70cmは掘り返しにより擾乱していた。調査地区内では116本の柱穴と土坑を5基検出した。柱穴は明瞭な建物プランに当てはまるのは少ない。特に調査地区的中央部二か所で、江戸時代末に粘土採取が行われており、この部分の柱穴が欠落していることも不明瞭な原因の一つとなっている。柱穴群や土坑群に伴う遺物は、土師器の碗と皿の破片が大半を占め、このほか須恵器や備前焼の甕の破片、それに柱の一部が遺存していた。

[2] 堆積層序（第5図）

- 1層（表土層） 水田であったため地表面は水平で、地表面より深さ22~23cmまでの1層である表土層は、暗茶褐色粘質土の耕作土で、平均した厚さで堆積していた。農耕による擾乱が繰り返されたためか層中には遺物は存在しなかった。1層の下部には厚さ5cm前後の黄褐色粘土がバンド状に堆積していたが、これは水田の底土である。
- 2層 水田底土層下の、地表面よりの深さ27~28cmから75cmまでの間の、47cmの厚さの2層は、暗褐色粘土が水平に安定した状態で堆積していた。2層の粘土は乾燥すると極めて固く、水分を含むと一変してドロドロの状態となる。この2層の粘土層面を掘り込んで、柱穴群や土坑群を構築していた。遺物の土師器片の一部は2層上面にも遺存したが、その大半は柱穴ないしは土坑内から出土した。柱穴や土坑といった遺構中以外の2層中からの遺物の出土は少なかった。従って、当時の生活面は2層上面であったということになろう。調査地区中央部の粘土採取跡は、2層の粘土を採取したためのものである。
- 3層 3層は地表より深さ75cm以下で、青褐色粘土からなっている。地表よりの深さ110cmまでは掘削により確認したが、それ以下は未確認のため不明である。3層中には遺構、遺物は存在しなかった。のことから、遺構面は2層上面だけということになろう。

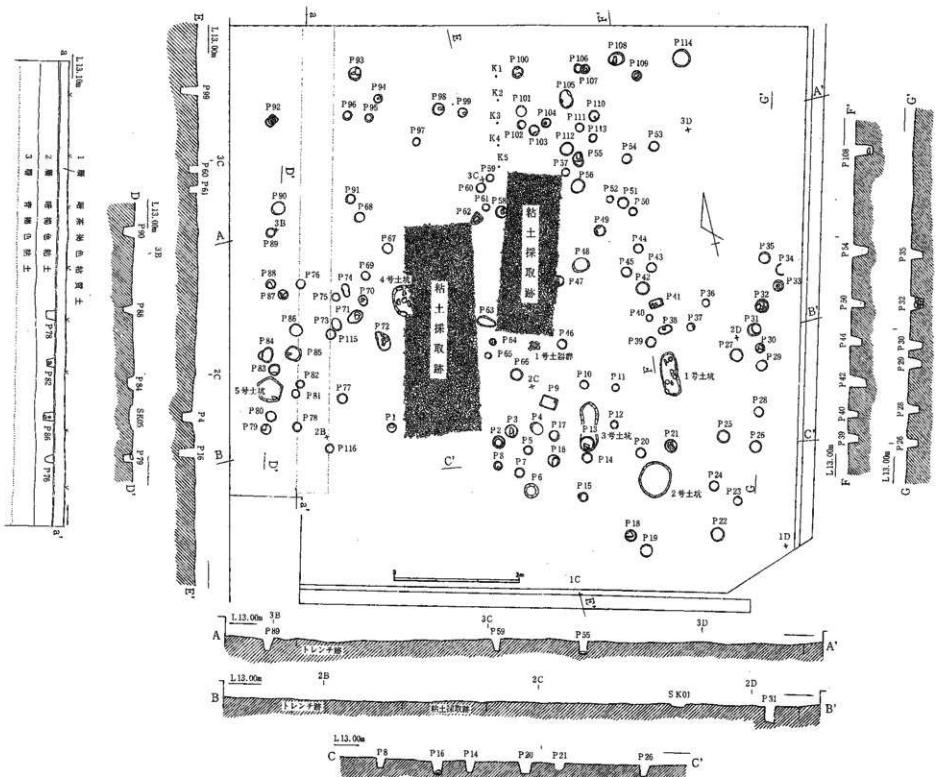
[3] 検出した遺構並びに出土遺物

遺構としては土坑が5基と柱穴が116本、それに近、現代のものとみられる杭を5本検出した。遺物は大半が土師器で、須恵器、瓦器、陶器、磁器、石器等が一部認められた。

1. 1号土坑と出土遺物

(1) 1号土坑（第6図）

1号土坑は1C区中央部北端にあり、北端の一部が2区に接している。1号土坑の主軸方向はN-1°-Eと南北を指向し、法面上全長107cm、床面上全長98cm、中央部の法面上幅42cm、同床面幅33cm、深さは北端で9cm、中央部8cm、南端で8cmと、心もち北端が深くなっている。平面プランは南北端が半円形でトラック状を呈し、床面は平坦である。土坑の法面幅は南部と東部が



第5図 遺構群の平・断面図

やや広く緩やかで、西部と東部は狭く急傾斜である。土坑の北西部の床面上には鉄剣が1口、剣先を南にして出土し、鉄剣に接して小型の土師器皿も出土した。北東の床面上には、完形の土師器碗が3点床面上から出土し、中央部の東部床面上からは完形の土師器碗や皿、破損した土師器碗数点分が重なった状態で出土した。また、破片の一部は東法面上からも出土した。土坑南西部

床面上からも完形の小型土師器皿が1点出土し、その東部床面上から $11 \times 6 \times 7\text{cm}$ の割り石が、さらにその上に乗った状態で土師器片が出土した。南端の法面上からも小型の土師器皿の破片が出土した。

(2) 出土遺物

① 土師器（第7図1～11）

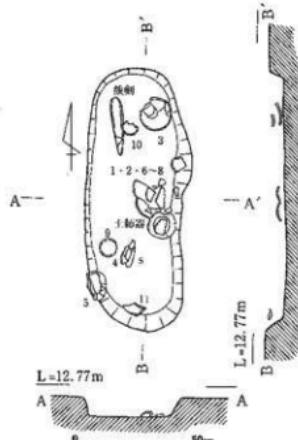
土師器碗が6点出土したが、うち完形品は3点で、他は口縁部と底部の破片である。碗は口径13.5、13、11.5、11cmとバラエティーに富んでいる。器高は3～3.7cmの範囲内である。碗は底径が6～8cmと大きく安定しており、底部から口縁部にかけては緩やかに内湾ぎみに立ち上がり、口縁端面は尖りぎみとなっている。底部は斂切りのあとを斂削りや叩きで整形している。色調はおむね明褐色ないし灰白色で、胎土は精選され、焼成は良く堅牢なものもあるが、総体的にやや不良で脆い。碗は表面ともヨコハケが中心で、一部指ナデも認められた。

土師器皿は5点出土したが、口径は最小の10が 6.5cm 、

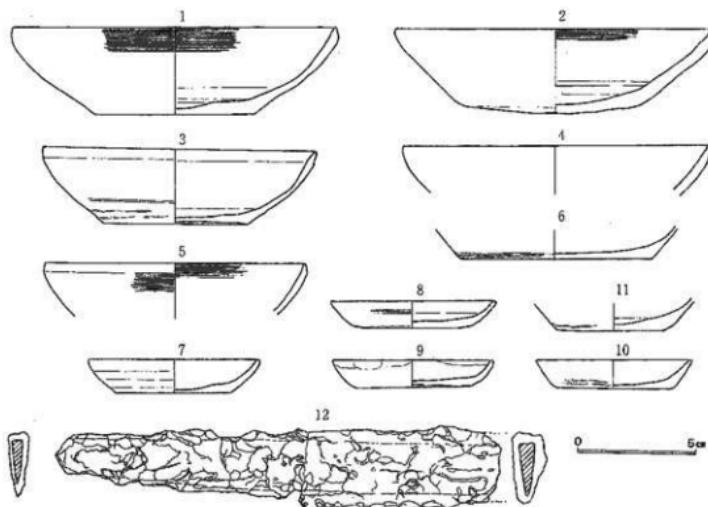
最大が7の 7.2cm と、同じものはない。ただ、器高は7が 1.5cm 以外は、すべて 1.2cm と共通している。皿は碗に比較して小型で、特に浅い。底部は7・9が粗雑な糸切りで、他は斂切りである。恐らく、回転台を使用するものの手捻り作品であったようである。焼成はやや不良で脆い。特に9の口縁部は摘みだしによる整形で、10は表面の底部近くを叩きで整形している。

② 鉄剣（第7図12）

土坑北西部の上面に接した状態で出土した鉄剣である。鉄剣は柄部と剣身の三分の一が欠落している。残存全長は 18.6cm 、剣身幅は欠損部で 2.2cm 、鎬幅 0.7cm で、鍛造品であるが鋳造が著しい。土坑内を精査したが、欠損部分が遺存しなかったことから、破損品を副葬ないしは埋納したとみなすべきである。発掘によって土坑そのものの性格を明らかにすることはできなかったが、東接する出作遺跡出土の木棺土壙墓の在り方などからすると、土壙墓の可能性が考えられる^⑤が、祭祀に係る鎮め物的な点も考慮の範囲外におくことはできない。



第6図 1号土坑平・断面図



第7図 1号土坑出土の土師器と鉄剣

2. 2号土坑と出土遺物

(1) 2号土坑（第8図）

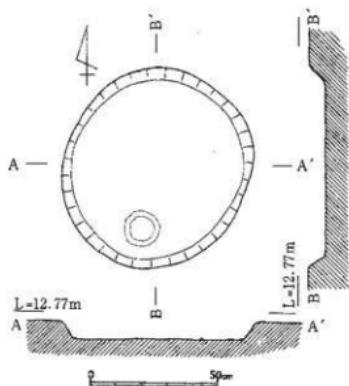
1C区の中央に所在した円形の土坑である。南北の法面上の長さ80cm、同床面上の長さ71cm、東西の法面上の長さ77cm、同床面上の長さ69cmで、ほぼ円形プランである。深さは6cmで、床面は平坦である。2層を約6cm掘り込んで構築している。床面の南部に浅い柱穴が穿たれている。周囲の法面幅はほとんど同じであり、埋土は淡褐色粘土であったが、遺物は全く出土しなかった。いかなる性格、目的をもった円形土坑であるのかは不明である。

3. 3号土坑と出土遺物

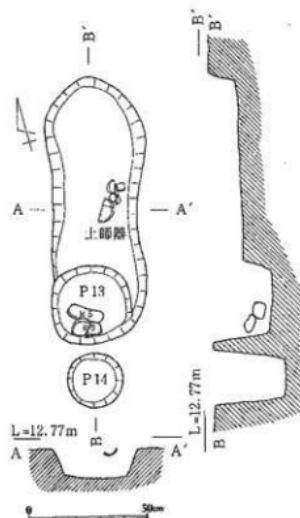
(1) 3号土坑（第9図）

1C区の北西隅近くにあり、東4mには1号土坑が、南東3.5mには2号土坑が所在している。3号土坑は長軸方向がN-15°-Eを指向し、南と北端が半円形を呈する細長い土坑である。長軸方向の法面上の長さは113cm、床面上の長さ105cm、中央部の法面上幅35cm、同床面上幅26cmで、北部と南部が若干膨らんでいる。深さは北部が11.5cm、南部が13cmと心もち北高南低となっている。土坑南端の床面上には、土坑の南法面に接して直径30cm、深さ25cmのP13の柱穴が穿たれている。3号土坑とP13との切り合い関係は、土坑が構築されたあと、P13を掘削している。土坑の南10cmにはP13に並ぶようにP14が所在していた。

土坑のほぼ中央部に土師器の碗の破片が数点出土したが、それらのほとんどは土坑埋土上面近くからの出土であった。土師器の近くから青磁の壺の口縁部の細片が1点出土した。土坑中の埋



第8図 2号土坑平・断面図



第9図 3号土坑平・断面図

土は淡黒褐色粘土で、土坑床面からの遺物の出土はなかった。なお、土坑内のP13中には3個の川石が遺存していた。この川石は柱の詰め石として入れられたものである。

(2) 出土遺物

① 土師器 (第10図13~20)

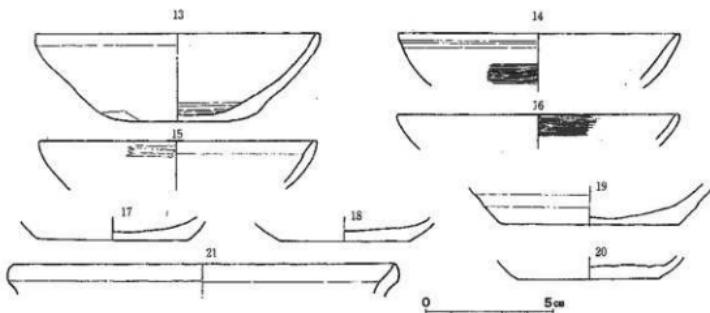
土師器はすべて碗の口縁部と底部である。碗は13~15とも口径が11cmと同じであるが、15のみ口縁部内に若干の稜が認められる。色調は赤褐色・明褐色・淡褐色で、表内面ともヨコハケで、15のみ表面に範削りが認められる。胎土は精選されているが、焼成はあまり良くない。17~20は碗の底部で、底径は5~7cmである。色調は碗と同じであるが、総体的に堅牢である。18~19の底部内面には渦巻き状の輪積み巻き上げ痕が顕著に残存している。底部は粗雑な糸切りの上を、範削りで整形している。

② 磁器 (第10図21)

青磁の壺の口縁部の細片が1点出土した。輸入磁器の一種で、中国系の青磁とみておきたい。口径は推定15cmで、色調は淡緑灰色を呈し、口縁部は小さく外反しながら立ち上がっている。3号土坑からはこの他、実測不可能な無文の純文土器片とみられるものが2点出土した。

4. 4号土坑 (第11図)

4号土坑は2B区の中央部にあり、東部の上面は後世の粘土採取によって削り取られ、そこに砂利が埋め込まれていた。土坑の長軸方向は南北を指向し、南北の法面上の長さ76cm、床面上の



第10図 3号土坑出土の土師器

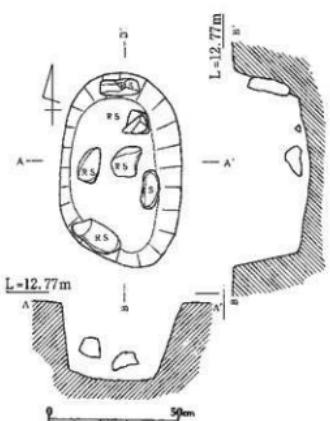
長さ60cm、東西幅は法面上48cm、床面上34cmで小判形を呈している。深さは中央部が30cmで、周辺が2~3cmと浅くなっている。土坑内には7個の川石が遺存していた。川石のなかには法面上に張りついた状態のものもあり、中央部の3個の石は床面上4~8cmにあった。石質は北端の法面上の川石が安山岩である以外はすべて和泉砂岩の川石で、東法面近くの川石は赤黒く焼けている。

土坑内の埋土は淡黒褐色で、遺物の出土はなく、湧水が激しかった。湧水からすると土壙墓の可能性は薄いが、この湧水が後世の粘土採取によるものであるとすると、焼けた石から炉址的なものとすることができる。

5. 5号土坑と出土遺物

(1) 5号土坑 (第12図)

5号土坑は2A区の南東隅近くに所在している。土坑の東西法面上の長さは58cm、床面上の長さ52cm、南北法面上の長さ60cm、床面上の長さ50cm、深さ12cmで、平面プランは五角形である。土坑の南端法面上に2個の和泉砂岩の割り石が重なった状態で遺存していた。遺物はすべて土師器で、小型皿以外は碗であった。土師器のほとんどは南端の和泉砂岩の山石の周辺の床面上から出土したが、なかには床面から5~6cm遊離した状態で出土した細片もある。床面は平坦で、土坑中の埋土は淡黒褐色粘土の単層であった。

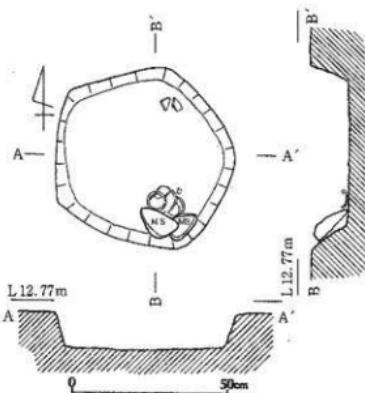


第11図 4号土坑平・断面図

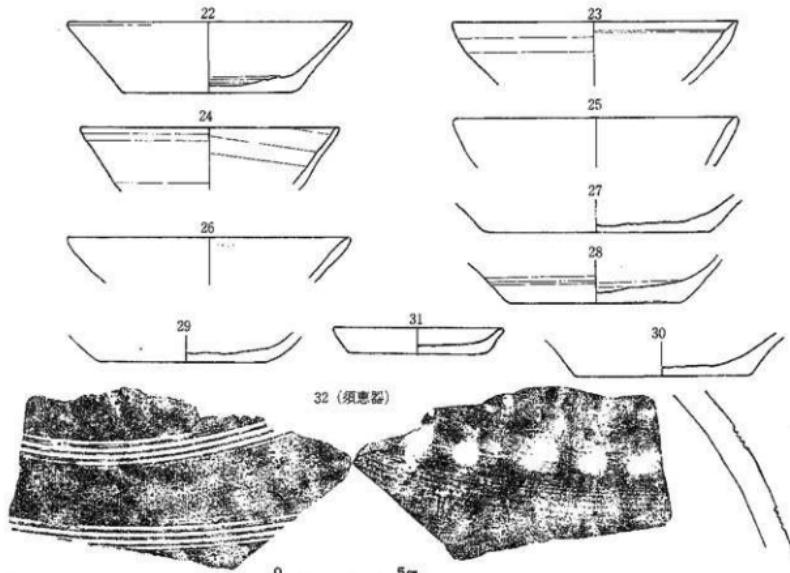
(2) 出土遺物

① 土師器（第13図22～31）

土師器は10数点出土したが、そのうち実測可能なものは10点であり、31の小型皿以外はすべて碗であった。碗の口径は24の10cmを除けばすべて11cmあり、大型の碗は出土していない。底部から口縁部への外反は心もち内湾ぎみであるほかは直線的で、底部と体部の境も27が丸みをもつ以外は角度があり明瞭である。1号・3号土坑出土の土師器碗とは器形に若干の違いが認められる。底部形態は22・28～30とも糸切りである。24は内面を箝削りで整形し、26は内面にベンガラを塗布している。色調は白灰色・灰褐色・淡紅色とそれぞれ違っているが、胎土はすべて精選している。焼成良好堅牢なものもある反面、不良で脆いものも認められる。土師器皿は31の1点で、



第12図 5号土坑平・断面図

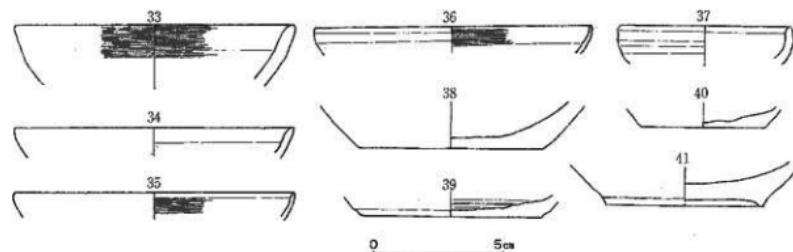


第13図 5号土坑出土の土師器とP38出土の須恵器

口径6.6cm、器高1cm、底径5.4cmと小型品である。底部は糸切りで、口縁部は指による摘まみ出しで整形している。色調は灰白色で、胎土は精選しているが、焼成不良でやや脆い。

6. 1号土器群（第14図）

2C区南西隅の粘土採取跡の南の2層上面から、土師器が集中して出土した。2層上面からは散発的に土師器の細片が出土したが、まとめて出土したのはこの地点だけであった。そのうち実測可能な土師器片は碗と皿の9点であったが、完形品は存在しなかった。碗はいずれも口径1.1cmと同じ大きさであり、口縁部はやや曲線的に内弯している。ただ、33は器壁が0.5cmと厚いのに対し、35・36は0.2cmと非常に薄く、かつ、口縁端が立ち上がっている。38～41は底部で、39・40は糸切り、41は低い高台をもっている。39の底部内面は輪積み巻き上げ痕が残っている。38・41の底部に伴う口縁部は33などで、40の薄手の底部に伴う口縁部は35・36であろう。37は口径6.6cmの厚手の土師器とみられるもので、表面にはヨコ指ナデの跡が残っている。



第14図 1号土器群出土の土師器

7. 木杭列（第5図K1～K5）

3C区の西部に南北方向に連なる5本からなる木杭列が出土した。木杭列の長さは2.15mで、杭間隔はほぼ55cmである。5本の木杭は2層中に約20cmの深さで打ち込まれていたが、2層の上に乗る水田床土上から打ち込まれており、2層上面の遺構とは直接関係はない。恐らく、戦後間もない時期の農耕用の杭列とみて大きな間違いはなかろう。

8. 柱穴群の概要

今回の調査地区内で116個の柱穴を検出したが、1A区と1B区は検出数が比較的少なかった。検出した柱穴群のなかのいくつかは掘立柱建物としてのプランを想定することができるが、それらについては後述することにして、ここでは柱穴群全体についてみてみたい。

(1) 二段掘り柱穴

発掘によって検出した柱穴数は、すでに述べた通り116個であるが、このうち二段掘りの柱穴はP2・P31・P55・P92の4個であり、うちP31とP55は二段目の掘り込みが一方に片寄っている。特に55の床面には偏平な安山岩を礎盤として置いていた。P2は径28cm、深さ14cmの柱穴底に、更に径18cmの柱穴を深さ25cmまで二重になるように掘削していた。P92は21×27cm、深さ15cmの長方形の中に、径17cm、深さ50cmの円形の柱穴を掘削していた。P92からは土師器が出土した。

(2) 遺物を伴う柱穴

① 土師器出土の柱穴

検出した116個の柱穴中、土師器並びに土師器片が出土した柱穴は、柱穴一覧表に示した60個である。そのなかでもP53やP92からは完形の土師器碗が出土している。その反面、出土状況が柱穴法面上からの出土もあれば、柱穴底面からの出土もあり、平均的には深さ5~6cmから20cm付近に集中して出土した。掘立柱建造物が破棄されたとの柱穴中に、土師器片が自然に流入埋没したものも一部あるが、深さ10cm以下や底面から出土することや、完形品を2~3枚と重ねている状況からすると、意図的に埋納ないし供獻した可能性が高い。

② 須恵器出土の柱穴

須恵器片が出土した柱穴はP83・P90・P98・P103の4個である。P83では深さ30cmの底面上から厚さ1.1cmの壺の胴部片が礎盤として置かれた状態で出土した。P90では柱穴法面上と、深さ5cmの二か所から出土したが、須恵器片以外の上師器等の出土はなかった。P98では深さ9~10cmから土師器とともに瓦器、弥生土器片が一緒に出土した。P103では須恵器片とともに土師器碗の細片が出土した。柱穴中からの須恵器片出土の割合は、土師器に比較すると格段に少なく例外的である。

③ 弥生土器片出土の柱穴

弥生土器の細片とみられるものがP15・P25・P31・P35・P43・P53・P55・P56・P74・P81・P99・P11の12個の柱穴中から出土した。これら土器片は時期を示す口縁部や底部、それに文様等もなく、胎土、焼成、厚さ等から弥生土器片とみたものである。しかし、実測もほとんど不可能である。弥生土器片は土師器や須恵器のような意図的埋納や供獻は考えられない。同じような弥生土器片は西部の宝剣田遺跡からも出土しており、これらが何んらかの原因で混入したものとみるべきであろう。

④ 瓦器出土の柱穴

黒灰色の瓦器の破片がP27・P33・P98・P102の4個の柱穴から出土したが、いずれもが細片で、実測可能なものは2点だけである。瓦器片の出土する柱穴からは共通して土師器片が出土し、P98からは弥生土器片、P10からは青磁片、弥生土器片が出土した。

⑤ 備前焼瓦片出土の柱穴

備前焼の壺ないし壺の破片が出土した柱穴は、P69とP97の2個である。P69出土の備前焼片は深さ23cmの柱穴底面からの出土であり、礎盤として置かれたものである。P97からのものは細片で、土師器、弥生土器片と一緒に出土した。

⑥ 磁器出土の柱穴

P56・P102の柱穴中から、輸入青磁とみられる細片が土師器片とともに出土したが、意図的な混入ではない。両柱穴中の青磁は、ともに法面上か柱穴上部からの出土であり、土砂とともに流入堆積したものである。

⑦ 川石(山石)出土の柱穴

柱穴法面上からの石の出土柱穴が11個あり、深さ5~10cmから14個、深さ10~20cmが4個、深

さ20cm以上が14個ある。深さ20cm以上のうちの6個は柱穴底面にあり、礎盤として使用している。特に柱穴中、詰め石であるといえる状態で出土したものはP32・P87・P100・P102・P103・P105・P107などである。使用している石は、そのほとんどが和泉砂岩の川石であり、それ以外は安山岩2、石英粗面岩と泥岩が各1個である。このほか、緑泥片岩の板状になった割り石がP1・P50・P71から、安山岩の割り石と安山岩の山石がP55から出土した。P62は本来は柱穴ではなく、和泉砂岩の砥石を転用した礎石である。柱穴出土の和泉砂岩は重信川にもあり、これらを搬入して使用したものであるが、遺跡周辺は粘土層だけであり、自然状況下では周辺での調達は不可能である。したがって、人為的に搬入し、礎盤や詰め石として使用したものであろう。板状の緑泥片岩は重信川や周辺にはないので、底部川上流か伊予灘に面した双海町海岸から搬入したものであろう。

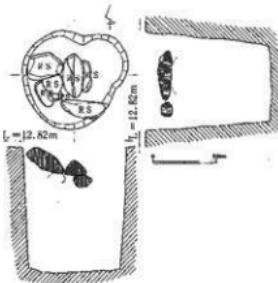
9. 柱穴

116個の柱穴の計測値については、一覧表を参照されたい。ここでは検出した柱穴のうち、礎盤や詰め石などをもつ、特徴ある柱穴並びに出土遺物のある柱穴についてのみ補足しておきたい。

- P2 1B区にあり、一段目は径28cm、深さ14cm、二段目は径18cm、深さ25cmの二段掘り込みの柱穴である。柱穴中からの遺物の出土は皆無であった。
- P3 1B区にある径29cm、深さ27cmの柱穴である。柱穴底部に10×18×16cmの和泉砂岩の川石が遺存した。恐らく、礎盤の役目をもたすための川石とみてよからう。柱穴中からの遺物の出土はなかった。
- P8 1B区にある径20cm、深さ26cmの柱穴である。柱穴底部から9×11×7cmの和泉砂岩（以下和泉砂岩を省略して砂岩とする）の川石が遺存し、その上から土師器片が出土した。
- P9 1C区にある長さ41cm、幅30cm、深さ26cmの長方形の柱穴である。柱穴中の深さ19cmから小さな砂岩の川石と土師器片が出土した。
- P13 1C区にある径33cm、深さ25cmの柱穴である。P13は3号土坑の南部の底面上に穿っている柱穴で、柱穴中の深さ7cmと深さ16cmに砂岩の川石が遺存した。恐らく、柱の詰め石用の石と理解すべきであろう。
- P15 1C区にある径26cm、深さ27cmの柱穴である。柱穴の西側法面上に、焼けて割れた安山岩が、深さ3cmの地点にも焼石の破片があり、深さ8cmには小さな砂岩の川石が遺存していた。柱穴の深さ10cm付近から土師器の細片とともに弥生土器片が1点出土した。
- P16 1C区にある径25cm、深さ33cmの柱穴である。柱穴の底部上から10×13×7cmの砂岩の川石が出土した。柱穴底が水分を含む柔らかい粘土となるため、柱が沈下しないための礎盤として利用したものである。柱穴中からの遺物の出土はなかった。
- P18 1C区にある長軸26cm、短軸24cm、深さ24cmの長円形の柱穴である。柱穴底部には24×26×12cmの砂岩の川石が残っていた。礎盤として利用したものである。柱穴中からの遺物の出土はなかった。
- P21 1C区にある長軸29cm、短軸26cm、深さ17cmの長円形の柱穴である。柱穴中の深さ10cmから、8×15×7cm大の研磨痕の残る砂岩の割れた川石が出土した。底部からの出土でな

いので、詰め石かもしれない。

- P 30 1 D 区にある径22cm、深さ33cmの柱穴である。柱穴底部から $8 \times 6 \times 4$ cmの砂岩の川石が出土した。底部からの出土であることから、礎盤として使用したものであろう。



第15図 P 32 平・断面図

- P 32 (第15図)

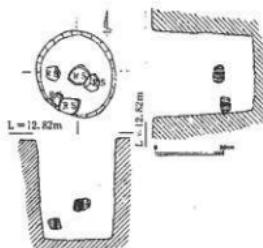
2 D 区にある径30cm、深さ40cmの柱穴である。柱穴内には 6 個の川石が遺存した。今回の発掘調査で検出した柱穴の中でも、多くの川石が詰まっていた柱穴の一つである。柱穴中の積み石の天端が柱穴上面であることからすると、礎盤とすることは無理であり、詰め石の崩れたものと理解すべきであろう。川石の周辺から土師器片が出土したが、いずれも細片のため図面化は不可能であった。

- P 33 (第16図)
- 2 D 区にある径23cm、深さ30cmの柱穴である。柱穴床面上 5 cm と 7 cm から砂岩の川石が、深さ22cmから土師器片が出土した。
- P 41 2 C 区にある長さ30cm、幅17cm、深さ20cmの長方形の柱穴である。柱穴中の深さ 5 cm から14cmにかけて 4 個の砂岩の川石が、法面上からは砂岩の山石が 1 個出土した。
- P 47 2 C 区にある径25cm、深さ29cmの柱穴である。柱穴上面に粘土採取跡埋立用のバラスが乗っていたことから、粘土採取以前に掘削した柱穴ということになろう。粘土採取は江戸時代の安政年間であることが記録として残っている。
- P 53 2 C 区にある径24cm、深さ24cmの柱穴である。柱穴壁面の深さ 5 cm と 10 cm に砂岩の川石が張りついた状態で出土し、柱穴中の深さ 15 cm に完形の土師器碗が 1 個伏せた状態で出土した。

- P 55 2 C 区にある一段目が長軸36cm、短軸24cm、深さ 18cm の長円形の、二段目が径22cm、深さ31cmの二段掘り込みの柱穴である。二段目柱穴中の底部には $15 \times 10 \times 8$ cm の黒色安山岩の川石が出土した。この石も礎盤として使用したものであろう。柱穴中からは土師器片が 11 点出土したが、いずれもが細片で図面化は不可能であった。

- P 58 (第17図)

2 C 区にある径27cm、深さ21cmの柱穴である。柱穴中の深さ 4 cm から石英粗面岩の大型石錐の破損品が、深さ 17 cm からは泥岩の川石が出土した。石錐の破片は両面とも研磨し、中央部に円孔の一部が残存している。恐らく、柱の詰め石に転用したものであろう。石錐の残存長は 8 cm、幅 9 cm、厚さ 3.7 cm である。

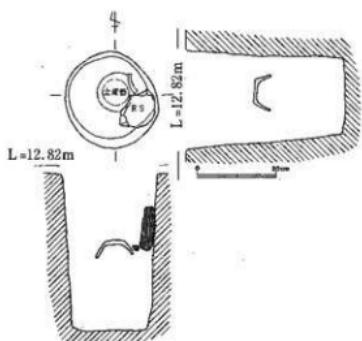


第16図 P 33 平・断面図

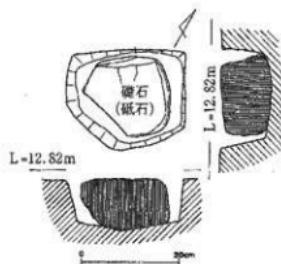
○ P 62 (第18図)

2 B 区にある長さ29cm、幅23cm、深さ50cmの窪みであり、底面には柱穴とはいえない。2層面上に16×20×10cmの砂岩の川石を利用した砥石を、礎石として直接置いた状態である。

○ P 69 2 B 区にある径20cm、深さ30cmの柱穴である。柱穴底近くから備前焼の壺の破片が水平状態で出土した。磨滅痕はなく、礎盤用に置いたものとみてよい。



第17図 P 58 平・断面図



第18図 P 62 平・断面図

○ P 71 2 B 区にある長軸40cm、短軸25cm、深さ30cmの長円形の柱穴で、柱穴底面上から緑色片岩の板状の割り石が出土した。礎盤として使用したものであろう。割り石上から土師器片が出土した

○ P 72 2 B 区にある長軸40cm、短軸30cm、深さ30cmの長円形の柱穴である。柱穴中の深さ3cmから安山岩の川石、深さ6cmから砂岩の川石、法面上から花崗岩の川石、深さ3~5cmから土師器皿の破片が出土した。

○ P 83 2 A 区にある径23cm、深さ30cmの柱穴である。柱穴南壁面下の底面に接して、砂岩の川石と須恵器の壺の胴部の破片が出土した。

○ P 87 2 A 区にある径23cm、深さ26cmの柱穴である。柱穴中の深さ2cmから14×6×5cmの砂岩の川石と、深さ5cmから6×6×4cmと16×6×6cmの砂岩の川石と土師器片が出土した。

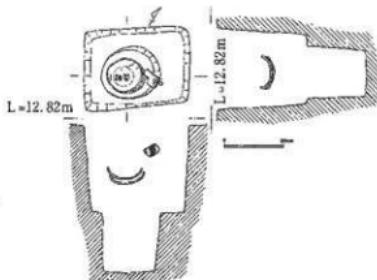
○ P 88 2 A 区にある径24cm、深さ15cmの柱穴である。柱穴中の深さ15cmから13×16×6cmの砂岩の川石を半截したものが、その石の下から5×5×3cmの砂岩の川石が2個と、底面から土師器片と小さな木炭片が出土した。

○ P 90 3 B 区にある径26cm、深さ25cmの柱穴である。柱穴法面上に接して須恵器片が、深さ5cmからは比較的大きな初期須恵器片が出土した。須恵器片には磨滅痕は全く認められないでの、自然の流れ込みは考えられず、柱穴中に意図的に重ねて置いたもので、埋納ないしは供獻的意味合いの強い須恵器片である。

- P 91 3 B 区にある径22cm、深さ32cmの柱穴である。柱穴底面から柱の炭化した細片が出土したので、この柱を主柱とした掘立柱建造物は火災によって消失したようである。柱穴中の深さ5~10cmから土師器片が3点出土した。
- P 92 (第19図)

3 B 区にある一段目が長さ28cm、幅21cm、深さ15cmの長方形、二段目が径16cm、深さ50cmの柱穴である。深さ6cmに砂岩の川石2個と土師器碗が3個重ねて置いた状態で出土した。意図的な埋納か供獻を目的としたものであろう。
- P 93 3 B 区のある径28cm、深さ43cmの柱穴である。柱穴中の壁沿いの深さ25cmから17×13×11cmの砂岩の川石が、その下の深さ20cmから土師器片が出土した。
- P 94 3 B 区にある径19cm、深さ38cmのやや小さい柱穴である。柱穴中央部の深さ28cmから38cmに、柱の一部が残存していた。柱は腐食が激しく、残存長10cm、径は6cmで、地下水が溜まっただけで溶解した。
- P 98 3 B 区にある径29cm、深さ37cmの柱穴である。柱穴中の深さ9cmから6×14×5cmの砂岩の川石が出土し、同レベルから土師器片と須恵器片、瓦器片が出土した。
- P 100 3 C 区にある径26cm、深さ46cmの柱穴である。柱穴壁面に沿うごとく砂岩の川石が2個出土し、大きい川石は20×24×13cmで、深さは14cmであった。
- P 102 3 C 区にある径20cm、深さ38cmの柱穴である。柱穴の西壁面の深さ24cmに細長い砂岩の川石が張りついた状態で出土した。底部近くから土師器片、弥生土器片、瓦器片が、深さ15cmから青磁片が出土した。
- P 103 3 C 区にある径24cm、深さ41cmの柱穴である。柱穴の南壁面沿いの深さ5cmから6×11×4cmの砂岩の川石が出土した。柱の詰め石とみてよからう。深さ20cm付近から土師器と須恵器の細片が出土した。
- P 104 3 C 区にある径20cm、深さ50cmの柱穴である。柱穴の中央部から径6cmの腐食した柱の一部が出土した。残存する柱の天端は深さ25cm、柱穴底までの長さは25cmで、立ったままの状態で出土した。先端に加工痕が認められた。柱の詰め石や礎盤はなかった。
- P 105 (第20図)

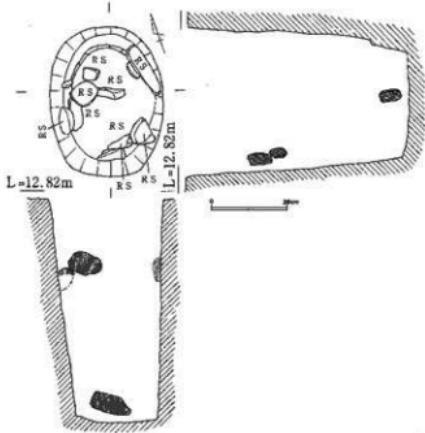
3 C 区にある長軸43cm、短軸29cm、深さ60cmの長円形の柱穴である。柱穴壁面の深さ3cmから34cmの範囲に同心円状に12個の砂岩の川石が、詰め石の状態そのまで出土した。柱穴中から土師器片が数点と弥生土器の細片が3点出土した。弥生土器片には時期を示すような特徴は



第19図 P 92 平・断面図

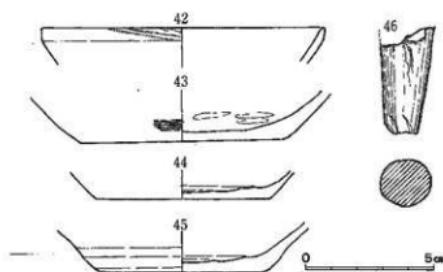
存在しなかった。

- P 107 3 C 区にある径20cm、深さ32cmの柱穴である。柱穴中の深さ16cmと25cmから砂岩の川石が出土した。法面近くの詰め石が落下した状態を示していた。石周辺から土師器片が出土した。



第20図 P 105 平・断面図

みで、口縁端は丸い。43~45はともに碗の底部であるが、43は底径8cm、底部は範切りで、内面は範押さえやヨコ指ナデで整形している。44・45は底部は糸切りで、内面はヨコ指ナデである。



第21図 P 1 (柱穴1) 内出土の土師器
(46はP 1の南20cm出土)

- P 108 3 C 区にある長軸38cm、短軸28cm、深さ45cmの長円形の柱穴である。柱穴底面上に25×34×10cmの砂岩の川石が出土した。礫盤として置いたものであろう。石の上から土師器片が数点出土した。

- P 109 3 C 区にある径21cm、深さ30cmの柱穴である。柱穴の法面上に21×21×10cmの砂岩の川石が乗っていた。

10. 柱穴中出土の遺物

柱穴中から出土した遺物をここで一括して説明したい。

① P 1 出土の遺物 (第21図42~46)

P 1 からは土師器の統の実測可能な細片が4点出土した。42は碗の口縁部で、口径11cm、口縁部が心もち内弯ぎ

46の脚の足はP 1 の南20cmの2層上面からの出土で、赤褐色を呈し、砂粒を多く含み、他の土師器とは胎土が大きく異なる。

② P 7 出土の遺物 (第22図47・48)

P 7 からは47の土師器皿と碗の口縁部の破片が出土した。47は口径6.4cm、器高1.3cm、底径4.9cmの小型皿で、口縁部は摘み出しで整形し、底部と体部の境は丸くて区別ができない。底部は糸切りである。48の碗は推定口径13cmで、口縁部は斜め直線的に外反し、口縁端は尖りぎみとなっている。

③ P 8 出土の遺物（第22図49～51）

P 8 からは49～51の土師器碗と皿の破片が出土した。碗の口径はともに11cmであり、口縁部は心もち内湾しているが、50は口縁端が尖っている。51の皿は口径に対して底径が広く、安定している。

④ P 9 出土の遺物（第22図52・53）

ともに土師器碗の口縁部と底部である。52は口縁部内面に低い稜をもち、大きく外反している。53の底部は糸切りで調整している。

⑤ P 10 出土の遺物（第22図54）

P 10からは土師器碗の口縁部の細片が1点だけ出土した。口径11cmで、内面にはヨコハケの跡が残存している。

⑥ P 12 出土の遺物（第22図55・56）

55の碗は口径11cmで、口縁部が内湾ぎみに直立し、厚さは0.25cmと薄い。56は碗の底部が糸切りで、底部と器壁は厚く、底部から体部にかけて弯曲している。表面には範刻み目が残存している。

⑦ P 15 出土の遺物（第22図57～60）

57～59は土師器碗の口縁部で、ともに口径は13cmと規格性をもっているが、59のみは口縁端が心もち内側に立ち上がっている。60は底部で、糸切りである。

⑧ P 19 出土の遺物（第22図61・62）

61は口径11cmの土師器碗の口縁部で、62は底径7cmの土師器碗の底部である。底部内面には輪積み巻き上げ痕が残存している。

⑨ P 20・P 22 出土の遺物（第22図63・64）

ともに土師器碗の底部と口縁部の破片である。63は底径7cmで、胎土中に微細な黒雲母を含み、他の土師器とは胎土が若干相違する。底部内面には巻き上げ痕が残存し、底部は糸切りである。P 22出土の口縁部は、口径11cmで、胎土は精選されているが、若干微細な石英粒を含んでいる。

⑩ P 25 出土の遺物（第22図65・66）

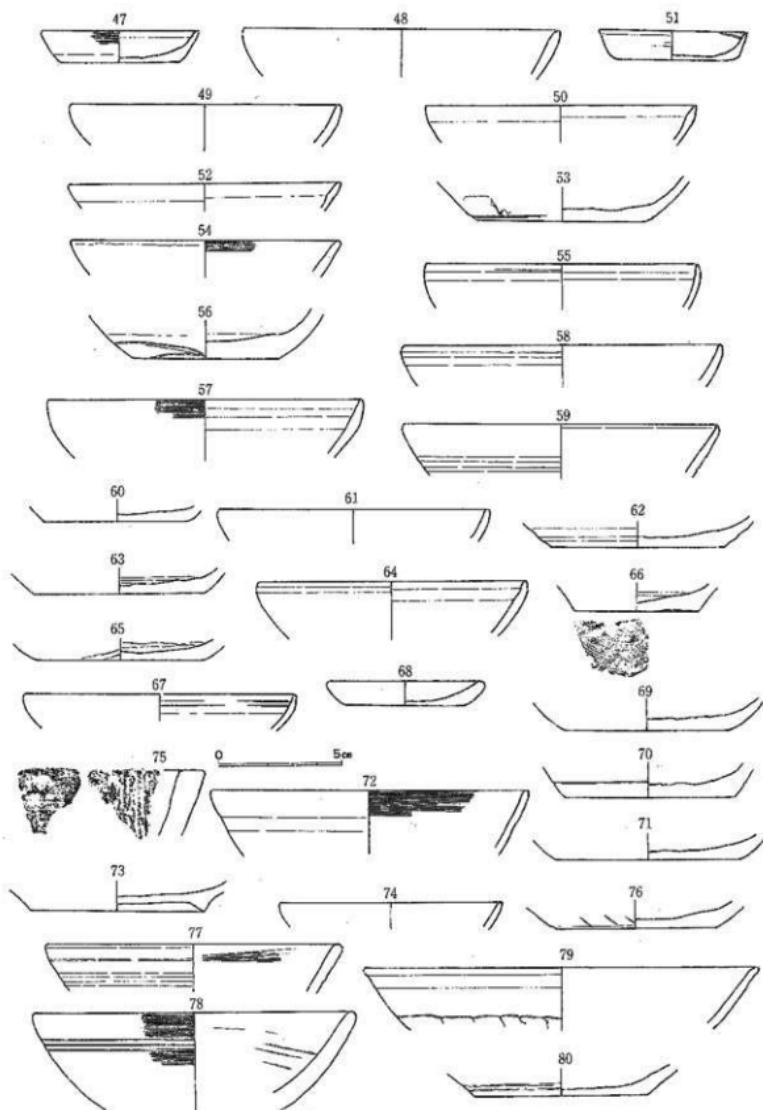
ともに土師器碗の底部で、65は底径6.5cm、66は底径5cmで、65は底部と体部の区別が若干あまいが、66は角度をもち明瞭である。両者とも底部内面に輪積み巻き上げ痕が残存し、底部はとともに糸切りである。

⑪ P 27 出土の遺物（第22図67・68）

67は土師器碗の口縁部で、口径11cm、口縁端は尖りぎみで、0.25cmと薄手である。68は小型土師器皿で、底部は薄く、口縁部は摘み出しによる整形であるが、不十分で厚い。

⑫ P 31 出土の遺物（第22図69～71）

いずれも土師器碗の底部であるが、底径がそれぞれ違っている。69・71は底部と体部の境が曲線的で明瞭ではないが、70は角度をもつていて明瞭である。69・70は表内面の磨滅が激しく、71は表面に黒く煤が付着している。ともに底部は糸切りである。



第22図 P 7~39 出土の土師器・弥生土器

⑬ P 33出土の遺物（第22図72・73）

72は口径13cmの土師器碗で、口縁部は斜め直線的に外反しており、深さのある碗とみられる。器壁の厚さは0.25cmと薄い。73は底径7cm、厚さ0.35cmの三角形の高台をもつ碗の底部である。高台は摘み出しによるものである。

⑭ P 35出土の遺物（第22図74・75）

74は口径9cmと、碗のなかでは小型の部類に属し、器壁も0.25cmと薄い。75は鉢の口縁部で、斜め直線的に外反し、口縁端は水平で、厚さは1.1cmあり、表面は横条痕文、内面は縱条痕文で、胎土中には花崗岩粒と金雲母を含み、色調は赤褐色で焼成良く堅牢である。弥生土器としておくが、縄文土器片とすべきかもしれない。

⑮ P 36・P 38出土の遺物（第22図76・77）

P 36からは76の底径6.5cmの土師器碗の底部が出土した。底部は糸切りである。P 38出土の77の口径12cmの土師器碗は、口縁部が斜め直線的に外反し、器壁は0.4cmと厚手で、表面には回転範囲の跡が残存している。

⑯ P 39出土の遺物（第22図78～80）

78は口径13cmの土師器碗で、器高は4.5cm前後である。厚さは0.6～0.7cmと厚手で、口縁部を丸く納め、表面には細い櫛描き沈線を3本めぐらしている。79は口径16cmと大型の瓦器碗で、0.25cmと薄く堅牢で、口縁下に範による溝があり、体部下に連続する指圧痕をもっている。80は土師器碗の底部で、底部は範切りのうち範削りで整形している。

⑰ P 43・P 49・P 50出土の遺物（第23図81～83）

P 43からは81の口径11cmの厚手の土師器碗の口縁部が、P 49からは82の鼎の脚部の破片が出土した。鼎は残存脚径が2.5cmあり、大型の鼎の存在が考えられる。P 50からは底径7.2cmの83の土師器碗底部が出土した。底部は糸切りである。

⑱ P 53出土の遺物（第23図84～90）

P 53からは土師器碗の口縁部片が5点、土師器皿が1点と弥生土器片が出土しており、柱穴のなかでは遺物の出土が多い。碗は口径が11cm、11.5cm、12.5cmと異なっている。84は口径11.5cm、器高3cm、底径7cmの完形品で、底部から口縁部にかけては斜め直線的に外反し、口縁端が心もち肥厚している。底部と体部の境はややあまくなっている。底部は範切りのあとを平行叩きで調整している。少なくとも糸切り底に先行する土師器碗である。89は小型の土師器皿で、全体的に器壁は厚手で、口縁部は摘み出しによって整形し、底部は範切りである。90は弥生土器の甕の胴部の破片であり、磨滅痕はなく、表面に凹凸が残り、表面には煤が付着している。

⑲ P 54出土の遺物（第23図91）

土師器碗の平底の底部が1点だけ出土している。表内面とも磨滅が激しく、底部は糸切りである。

⑳ P 56出土の遺物（第23図92～94）

口径11cmで器壁の薄い土師器碗の口縁部が2点と、94の底径7cmの碗の底部とみられるものが1点出土した。94の底部は糸切りである。

㉑ P 57・P 67出土の遺物（第23図95・96）

P 57からは底径7cmの碗の底部とみられる95が出土した。底部は糸切りである。P 67からは口径11cmの、口縁部が斜め直線的に外反する96の土師器碗が出土した。胎土中には微細な頁岩粒と砂岩粒を含んでおり、表面はクシ目の上をハケで整形している。

㉒ P 68・P 69出土の遺物（第23図97～99）

P 68からは底径6cmと6.5cmの土師器碗の底部片が出土した。97は底部と体部の境が曲線的で区別がつかない。98は角度があり、内湾ぎみに外反している。P 69からは99の口径11cmの土師器碗の口縁部が1点出土した。口縁部は斜め直線的に外反し、輪積みによる巻き上げ調整痕が顕著に残存している。

㉓ P 72出土の遺物（第23図100～104）

P 72中から土師器碗の口縁部が3点、底部片が2点出土した。碗の口径は3点とも11cmであるが、底部片は底径6cmと7cmの二つになり、ともに底部と体部の境が曲線的となり区別がつかない。底部は斂削りで凹凸が認められる。

㉔ P 74出土の遺物（第23図105）

P 74からは口径11cmの土師器碗の口縁部が出土した。口縁部が斜め直線的に外反し、口縁部が若干肥厚している。器壁はやや薄手で、内面は一部が鏡研磨されている。

㉕ P 58・P 69出土の遺物（第24図107・第25図108）

P 58からは石英粗面岩製の大型石錘の破片が出土した。破損品の一部であるが、全面研磨し、中央部の割れた部分の一部に円孔を穿った跡が認められる。時期は不明であるが、漁撈用の石錘と理解してよからう。P 69からは備前焼の壺の胴部破片が出土した。焼成良く、表内面に指圧痕が顕著に残存している。107・108はともに柱の礎盤である。

㉖ P 76出土の遺物（第23図106・第26図109・110）

P 76からは106の弥生土器の壺の口縁部が1点と、土師器碗の口縁部、それに皿の底部が出土した。弥生土器片は直立する口縁部の口縁下に、垂れ下がる凸帯をめぐらす前期後半の土器である。凸帯より下部には煤が付着している。土師器碗は口縁部が斜め直線的に外反し、輪積みの痕跡が凹凸として残存している。110は小型皿の底部である。

㉗ P 81出土の遺物（第26図111～113）

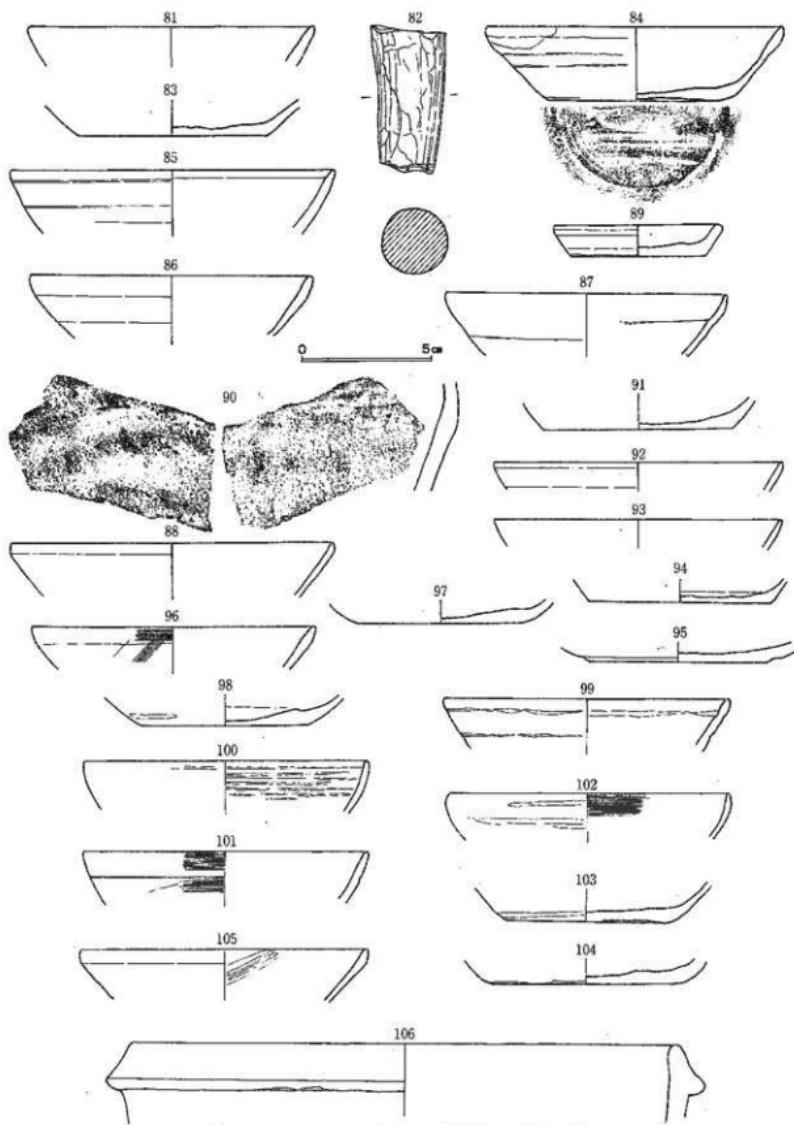
土師器碗は口径13cmと11cmの二群あり、111は口縁部の口縁端が立ち上がって細くなっている。112は口縁部がやや曲線的に開く碗である。底部は底径8cmとやや大きく、底部は斂切りである。

㉘ P 85出土の遺物（第26図114～118）

P 85からは土師器碗の口縁部3点、底部1点、小型皿1点が出土した。碗は口径が13cmで、口縁部が斜めにやや内湾しつつ開き、表内面はハケ調整で、底部は斂切りのち斂削り整形している。小型皿は口縁部を摘み出しにより整形しており、底部は糸切りである。

㉙ P 87・P 88出土の遺物（第26図119～121）

P 87からは土師器碗が2点出土した。119は口径13cm、器高3.5cm、底径8cmで、口縁部の立ち上がりは斜め直線的であるが、心もち内湾している。内部には輪積み巻き上げ痕が顕著に残り、

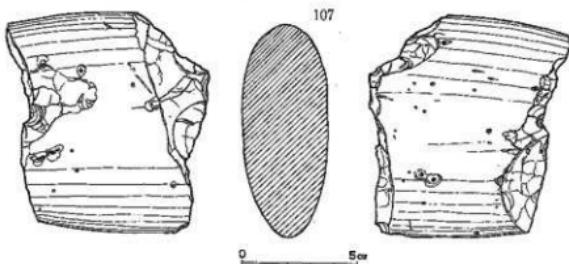


第23図 P43~76 出土の土師器・弥生土器

底部は糸切りのあと箝削りで整形している。P 88からは土師器碗の口縁部が木炭片と一緒に出土している。

㉙ P 90出土の遺物（第26図122～126）

P 90からは口径11cmの土師器碗の口縁部が3点と、須恵器片が2点出土した。碗の形態は119と大きさの違いはあるものの同形である。125・126は須恵器壺の胴部の破片で、青灰色を呈し、やや軟質で、表内面は平行叩きを角度を変えて格子目状に付いている。内面は同心円状の当て道



第24図 P 58 出土の大型石錘

具跡をクシで丁寧に消しているが、その痕跡が一部残っている。これら須恵器は5世紀中葉の初期須恵器の範疇に納まるものである。

㉚ P 91・P 92出土の遺物（第26図127～129・第27図130）

P 91からは口径11cmの土師器碗の口縁部が1点出土した。器形は他の土師器碗と同じであるが、表面のハケ目の一部が弧状となっている。P 92からは128・129・130の完形の土師器碗3点が重な



第25図 P 69 出土の備前焼変拓影
った状態で出土した。碗は口径が11、11.5、13cmの三種類あり、器高、底径も違いバラエティーに富んでいる。体部から口縁部へは斜めに立ち上がっているが、すべてがわずかに内湾ぎみとなっている。底部と体部の境は棱があつて区別は容易である。

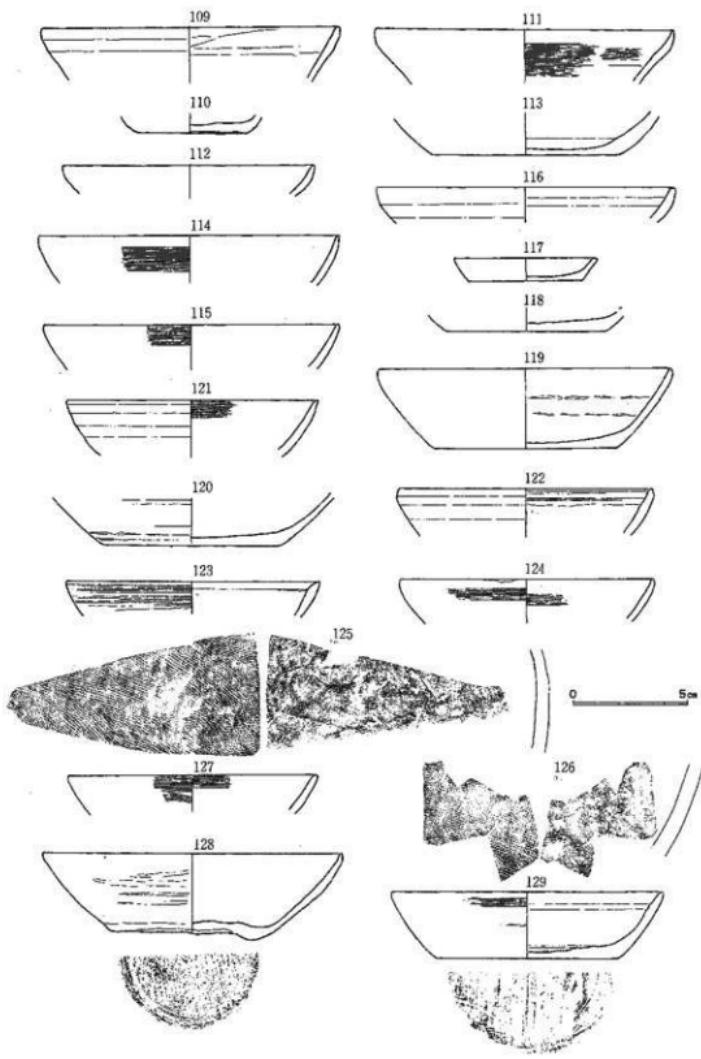
㉛ P 93出土の遺物（第27図131～133）

P 93からは土師器碗の破片が3点出土した。131はP 92出土の碗と同じ器形であり、底部内面に輪積み手法の跡が顯著に残存している。底部は箝切りのあとを箝研磨している。他の2点の碗も口縁部の形態は大きさに違いはあるものの、131と同じである。

㉜ P 94出土の遺物（第28図134）

器高の高い、口径12cmの碗の口縁部が1点だけ出土した。表内面とも磨滅が激しい。

㉝ P 98出土の遺物（第28図135～140）



第26図 P 76~92 出土の土師器・須恵器

P 98からは瓦器、土師器、須恵器片が出土した。135は口径11cmで、口縁部が斜め直線的に外反し、口縁下1cm付近で若干内反する黒灰色の薄手の瓦器碗の口縁部である。土師器は碗の口縁部と底部で、口縁部は斜め直線的に開き、胎土中に微細な石英粒を若干含み、底部は糸切りである。138は須恵器の大きな台付壺の台脚部で、脚端が爪先立っている。139・140は壺の胴部の破片で、黒灰色ないし青灰色を呈し、軟質である。139は表面を格子目叩きで整形し、内面は同心円状叩きの上を丁寧に指ナデで消している。140は表内面とも指ナデであり、ともに初期須恵器の範疇に属するものである。

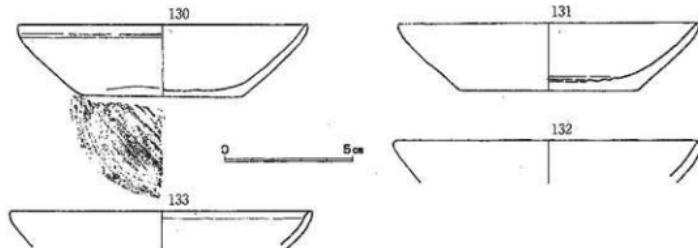
⑨ P 99出土の遺物（第28図141）

口径11cmの土師器碗の口縁部が1点だけ出土した。

⑩ P 100出土の遺物（第28図142～146）

口径11cmの土師器碗の口縁部が1点と、碗底部が3点出土した。底部3点はともに底部と体部の境は明瞭で、ややはみ出しがみであり、底部の143は範切り、144・145は糸切りである。146は半分が欠落した長さ3.3cm、幅2.5cm、厚さ1.2cmの、断面が長円形の和泉砂岩の磨き石である。

⑪ P 102出土の遺物（第28図147～151）

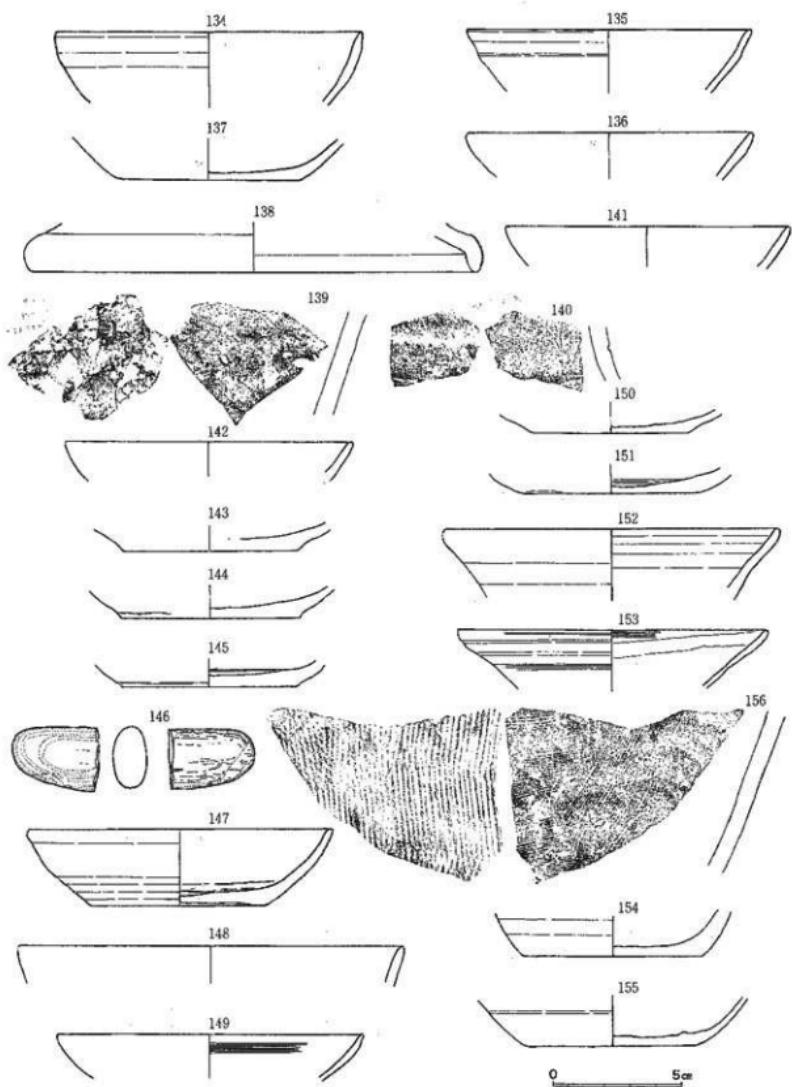


第27図 P 92～93出土の土師器

法面付近から図化が難しい青磁片1点と、底部から土師器碗の口縁部と底部、それに瓦器片が出土した。147は口径12.5cm、器高3cm、底径6.5cmの土師器碗で、口縁部への立ち上がりは斜め曲線的で、やや内弯している。底部内面には輪積み巻き上げ痕が残存し、底部は糸切りの上を範押し当てで整形している。150は瓦器碗の底部で、底部は糸切りである。151の土師器碗の底部は、底部内面に輪積み巻き上げを指ナデした跡が残り、底部は糸切りである。

⑫ P 103出土の遺物（第28図152～156）

土師器碗の口縁部片が2点と、底部片が2点、それに須恵器片が1点出土した。152・153の土師器碗は、口縁部が大きく直線的に外反し、口縁下で更に外反しており、他の土師器碗とは若干相違している。153はとくに薄い作りである。碗底部近くは曲線的に開き、底部と体部の境は154は明瞭であるものの、155は曲線的で、あまり明瞭ではない。底部はともに糸切りである。156は須恵器壺の下胴部片で、青灰色軟質で、表面は継平行叩きで、内面は同心円状の当て道具跡を細いクシ目で丁寧に消しており、初期須恵器の範疇に属するものである。



第28図 P94~114 出土の土師器・須恵器・瓦器・石器

㊱ 105出土の遺物（第29図157～160）

弥生土器片1点と土師器皿の破片が3点出土した。157は弥生土器の壺の口縁部で、口径22cmで、口縁部がわずかに内湾ぎみに直立し、口縁部に貼り付けによる三角形状凸帯をめぐらしている。色調は茶褐色で、胎土中に石英粒と金雲母を含んでいるが、内面は鏡研磨で整形している。P76の106は弥生土器片とほとんど同じである。158は土師器皿の厚手の口縁部で、159・160は碗底部である。底部はともに内面に輪積み巻き上げ痕が残り、底部は糸切りのあとを鏡削り落として整形している。

㊲ P 107出土の遺物（第29図161～164）

土師器皿の口縁部が1点と底部が2点、皿が1点出土した。碗の底部はともに径が6.5cmで、162は底部と体部の境に弱い段があり、内面には押圧痕が残り、底部は鏡切りである。163は底部と体部の境が曲線的で不明瞭であり、内面に輪積み巻き上げ痕が残り、底部は糸切りである。164の小型皿は口径7.5cm、器高0.9cmで、口縁部は摘み出しであるが特に浅く、底部は糸切りである。

㊳ P 113・P 114出土の遺物（第29図165～167）

P 113からは土師器皿の口縁部と底部が各1点出土した。166の底部は底部と体部の境が曲線的で区別がなく、底部内面には輪積み巻き上げ痕が残り、底部は糸切りである。P 114からは口径1cmの土師器皿の口縁部の細片が1点出土した。

㊴ 2層上面出土の遺物（第30図168～181）

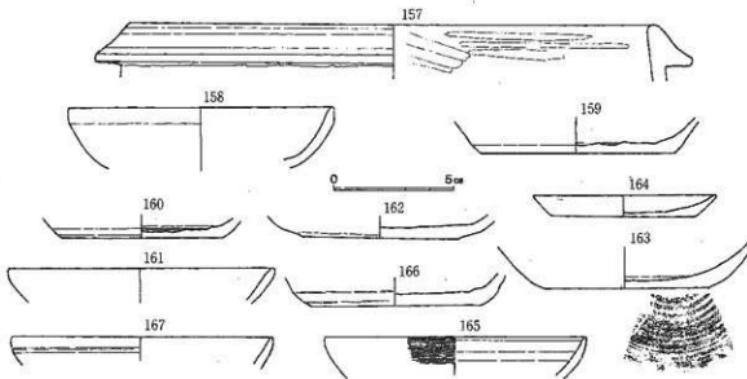
2層上面から出土した土師器片であるが、その出土場所を特定することができない。土師器皿の口縁部と底部、それに小型皿が4点出土した。土坑内や柱穴中から出土した土師器との違いはほとんど認められない。168の碗は半球状に内湾し、169は漏斗状に大きく外に開いており、底径は小さいようである。底部も特別に変わったものは出土していない。小型の土師器皿のうち178の口縁部は、内側に急に内湾している。皿は口径が6～7cmの範囲内であるが一個一個大きさ、器形に違いがみられる。底部も178・179・181は糸切りであるが、180だけは鏡切りであり、179は口縁部が薄く、表面は鏡削りで整形している。皿が一つ一つ違うのは手捻りによって製作したからであろう。

11. 据立柱建造物群（第31図）

柱穴数は合計116個出土しており、この柱穴数からすると、相当数の建造物ないし木構造等の遺構の存在が推定可能であるが、既に述べた如く、周辺部の様子や発掘地区中央部の粘土採取によって破壊しているので、十分な建造プランは不明である。ここでは取り敢えず建造物を13棟と柱列を4列推定したが、これが正しいかどうかの判断には躊躇せざるを得ない。参考までに列記したということでご勘弁を願いたい。なお、柱穴の計測値は別表の柱穴計測値一覧表を参考にしていただきたい。

（1）1号据立柱建造物

1B区北東隅にあり、一部1C区にかかるP2・P8・P16・P16・P17の4本柱からなる平面プランが長方形を呈する小型建造物である。P2～P8とP16～P17の梁行は各60cm、P2～P17とP8～P16の桁行は各130cmである。長軸方向はN-83°-Wを指向しており、P8中から



第29図 P 105 ~ P 114 出土の弥生土器と土師器

土師器が1点出土した。ただし、P 2・P 8・P 7・P 16・P 17・P 4・P 3・P 2の環状に分布する柱穴群とその中央のP 5が、一つの特殊な円形掘立柱建造物とするならば、このプランは成立しない。2号・3号掘立柱建造物も同じである。

(2) 2号掘立柱建造物

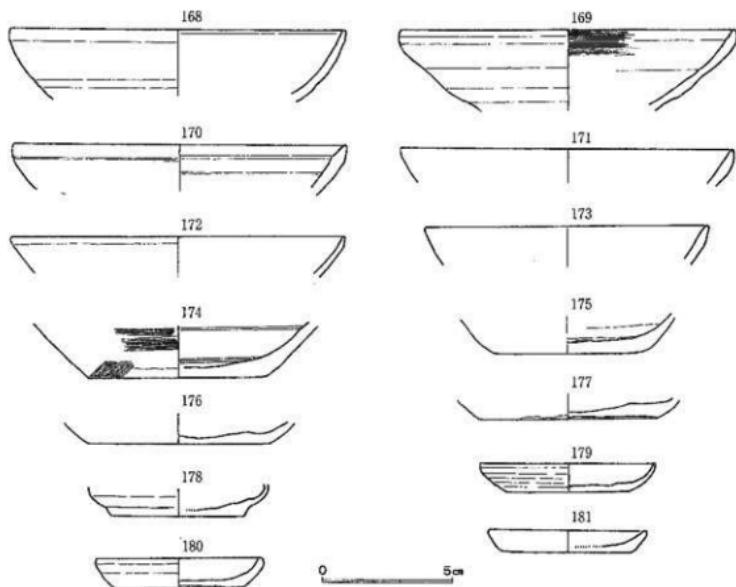
1B区と1C区の北部に所在するP 3・P 6・P 20・P 11の4本柱からなる長方形プランの掘立柱建造物である。P 3～P 6間とP 20～P 11の梁行は160cm、P 3～P 11間とP 6～P 20の桁行は270cmで、長軸方向はN-82°-Eを指向している。P 20中から土師器の底部片が2点出土した。1号・3号掘立柱建造物と一部が重複している。

(3) 3号掘立柱建造物

1号・2号掘立柱建造物と同じ場所に所在するP 7・P 15・P 12・P 9の4本柱からなる長方形のプランに近い建造物である。P 7とP 9の線上にP 4・P 5が等間隔に存在するが、これが本建築物に関係する柱穴であるかどうかは明らかでない。P 7～P 15とP 9～P 12の梁行は各160cm、P 7～P 9とP 12～P 15の桁行は各180cmで、長軸方向はN-35°-Eを指向している。4本の柱穴中からいずれも土師器片が多く出土した。恐らく、土師器片を柱穴中に意図的に埋納したものであろう。時代は土師器の底部が糸切りであることから12～13世紀を前後する時代の祭祀的な建造物の可能性が強い。

(4) 4号掘立柱建造物

1C区北部と2C区南部にかかるP 21・P 26・P 31・P 38の4本柱の長方形プランの掘立柱建造物である。P 21～P 26とP 31～P 38の梁行は各210cm、P 21～P 38とP 26～P 31の桁行は280cmで、長軸方向はN-14°-Eを指向している。5号掘立柱建造物の南部と一部重複し、P 21～P 38の線上には1号土坑が遺存している。P 31とP 38中から土師器片が出土した。



第30図 2層上面出土の土師器

(5) 5号掘立柱建造物

2C区南東隅にあり、一部が1C区と1D区・2D区にかかる、P30・P32・P41・P39の4本柱の長方形プランの掘立柱建造物である。P30～P32とP39～P41の梁行は各100cm、P30～P39とP32～P41の桁行は各260cmで、P32とP41のはば中間には小さなP36がある。長軸方向はN-76°-Wを指向している。P30とP32・P41からは詰め石が、P32・P36・P39からは数点ずつの土師器片が出土した。

(6) 6号掘立柱建造物

1D区と2D区、それに1C区に一部がかかるP29・P27・P34の掘立柱建造物で、その大半はコンクリート畦と道路建設によって破壊消滅している。P27～P29の長さは65cm、P27～P34の長さは230cmで、長軸方向はN-41°-Eを指向している。P27中から土師器片と瓦器片が出土した。ただ、P29が南北に連なる柱穴列とするならば、建造物の可能性を否定しなければならない。

(7) 7号掘立柱建造物

2C区の南部に所在するP38・P43・P47・P46の4本柱の長方形プランの掘立柱建造物である。P46～P47とP38～P43の梁行は各150cm、P38～P46とP43～P47の桁行は各230cmで、長

軸方向はN—84°—Wを指向している。P43とP47の線上にP45があるが、本掘立柱建造物に関係するものか否かは不明である。P47以外の柱穴中からは土師器片が出土した。なお、P38は4号掘立柱建造物の柱穴と重複しているため長円形となっている。

(8) 8号掘立柱建造物

2 C区と3 C区にかけて所在するP49・P54・P101・P59の4本柱の長方形プランの掘立柱建造物である。P49～P54とP59～P101の梁行は各180cm、P49～P59とP54～P101の桁行は各280cmで、長軸方向はN—52°—Wを指向している。P49中から土師器片と鼎の足が、P54から土師器片が出土した。

(9) 9号掘立柱建造物

3 C区の南部と2 C区の北部の一部にかけて所在するP55・P53・P109・P105の4本柱の長方形プランの掘立柱建造物である。P53～P55とP109～P105の梁行は各180cmで、桁行はP51～P105が150cm、P53～P109が170cmと若干歪である。長軸方向はN—88°—Eを指向している。4本の柱穴にはいずれも詰め石があり、P53の底面からは土師器碗の完形品が伏せた状態で、P55の底面からは安山岩の川石が礎盤状の状態で出土した。

(10) 10号掘立柱建造物

3 C区のほぼ中央に所在するP102・P110・P107・P100の4本柱の長方形プランの掘立柱建造物である。P100～P102とP107～P110の梁行は各120cm、P102～P110とP100～P107の桁行は各170cmで、長軸方向はN—79°—Wを指向している。4本の柱穴とも詰め石をもち、P102中からは弥生土器片、土師器片・瓦器片が、P100とP107中からは土師器片が出土した。詰め石用の川石や土師器は、柱穴底面上ないし直上からの出土であった。9号と8号掘立柱建造物と一部で重複している。

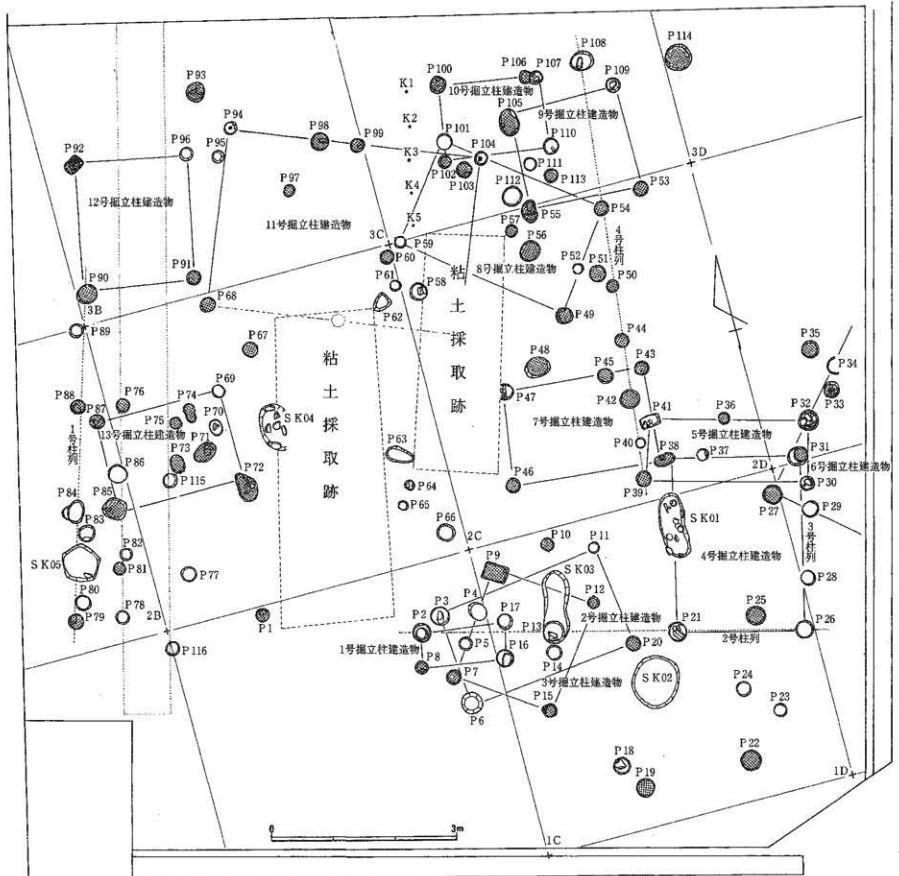
(11) 11号掘立柱建造物

2 B区と2 C区・3 B区・3 C区にかけて所在するP68・P94・P99・P104の4本柱の長方形プランの掘立柱建造物である。P99とP104に対応する柱穴は存在しないが、恐らく、二つの粘土採取跡によって消失したと推定可能である。P68～P94の梁行は280cm、P94～P104の桁行は400cmで、中間の200cmにP99があり、6本柱の長方形プランの掘立柱建造物と推定可能である。建造物の長軸方向はN—84°—Wを指向している。P94とP99の間のP98が本建造物に関係する柱穴であるのかどうかは明らかでない。なお、P94とP104には柱の一部が遺存していたし、P68とP99中からは土師器片が出土した。

(12) 12号掘立柱建造物

3 B区の南西隅に所在するP90・P91・P96・P92の4本柱からなる長方形プランの掘立柱建造物である。P90～P91とP92～P96の梁行は各180cm、P90～P92とP91～P96の桁行は各200cmで、長軸方向はN—9°—Eを指向している。P90の法面下5cmから大型の須恵器片が、P91とP92の法面下15cmからは土師器碗が重ねられた状態で出土した。恐らく、P92中に土師器碗を埋納したものであろう。P90中出土の須恵器は初期須恵器であるが、出作遺跡から出土した須恵器片を拾い、これを柱穴中に入れたもので、柱穴や本遺跡の時代・時期をあらわすものではない。





第31図 掘立柱建造物群・柱列群と土器器出土の柱穴（網目のある柱穴）

(13) 13号掘立柱建造物（第31図）

2B区の西部と一部2A区にかかるP85・P72・P69・P87の4本柱からなる長方形の掘立柱建造物である。P85～P87とP72～P69の梁行は150cm、P85～P72とP69～P87の桁行は200cmで、長軸方向はN-87°-Wを指向している。4本の柱穴とも土師器碗が出土し、P69の底面には備前焼の壺の破片を礎盤として置いていた。

12. 柱穴列（欄列）遺構

4列の柱穴列が推測可能であるが、そのいずれもが掘立柱建造物と重複しており、掘立柱建造物のプランが正しいとすれば柱穴列は存在しないことになる。

(1) 1号柱穴列

2A区と3B区にかかるP79・P84・P88・P90の4本柱からなる柱穴列である。各柱穴間隔はすべて170cmであり、主軸方向はN-18°-Eを指向している。ただし、P90は12号掘立柱建造物と重複している。P90のかわりにP89の可能性も考えられるが、この場合だとP88とP89との間隔が120cmとなり、すべての柱穴間が等間隔とはならない。

(2) 2号柱穴列

1B区と1C区にかけて所在するP2・P13・P21・P26の4本からなる柱穴列である。東部は道路となっており、更に延びる可能性がある。ただ、P2は1号、P21とP26は4号掘立柱建造物と重複している。各柱穴間隔は200cmで、各柱穴径も26-33cmと大きく、深さもともに深い。発掘中においても最も規則性のある柱穴列との印象が強い。主軸方向はN-77°-Wを指向している。

(3) 3号柱穴列

1C区と2D区にかけて所在するP26・P28・P29・P30・P32・P35の6本からなる柱穴列である。主軸方向はN-16°-Eを指向している。6本の柱穴間隔はすべて異なり、規則性は認められない。柱穴列の如く並んではいるが、柱穴列の可能性は低い。

(4) 4号柱穴列

2C区と3C区にかけて所在するP39・P40・P42・P44・P50・P54・P108の8本からなる柱穴列である。P39～P42とP50～P54、P42～P44とP44～P54が等間隔である以外は間隔が異なり、柱穴の径、深さ等もそれぞれ相違し、直線的に並んではいるものの規則性は認められなく、柱を伴う欄列とするにはや問題を含むものである。主軸方向はN-6°-Eを指向している。

IV 総括

今回の調査地区は極めて限られた狭い範囲であったが、116個という多くの柱穴と5基の土坑を検出することができた。これら遺構はすべて第2層中に構築されており、層位的にも調査中の観察結果からみても、ほぼ同じ時代・同じ時期に属する遺構・遺物とみてよいものである。ただ、同時期といつても同じ柱穴でも時間的には若干前後するものもあるようであるが、その範囲は200年間ぐらいであろう。

検出した5基の土坑は、3号土坑とP13との切り合い関係から、土坑群が先行しており、そのあとに柱穴、すなわち掘立柱建造物を構築している。特に1号土坑からの鉄剣や土師器碗、皿の出土状況から見る限りでは、土壤墓の可能性が強い。ただ、人骨、木棺片等もなく、土坑の規模からすると、1号・2号土坑とも全長が100cm前後であることから、土壤墓と仮定しても子供用とみなければならない。1号・3号、5号土坑とも出土遺物は鉄剣を別とすれば、土師器碗と皿だけであることからすると、鎮め物的性格を有する可能性も多分にあり、祭祀的性格を考慮の範囲外におくことはできなかろう。5号土坑を墓坑とするならば、その大きさから火葬墓以外は考えられないが、その痕跡すら窺えず、土師器片を多く出土したことから、祭祀的性格が強い土坑とみてよかろう。

柱穴のうちの幾つかは大型柱を想定できるものもあるが、総体的には小さく、小型の掘立柱建造物であったとみられる。特にP4・P104中に残存していた柱は小さく、粗末な建造物であった可能性が大である。柱穴中に礎盤として川石を置いたり、川石による詰め石を多用していたのは、粘土層中に掘立柱建造物を構築したため、柱の固定が容易でなく、かつ柱が沈むことを防ぐために行った構築方法であったものであろう。このような例は弥生後期の住居址⁹⁾でもみられるものである。P88の柱穴底から土師器とともに柱の炭化した破片が出土したことは、このP88を主柱とした建造物は、火災で消滅したことを物語っている。更にP53やP92の柱穴中に、完形品の土師器碗を意図的に埋納していたことは、この埋納が鎮め物として用いられていたことをあらわしており、その建物は倒壊したため廃棄したのではなく、柱などは引き抜き、その柱跡に土師器を埋納したものであろう。このことは祭祀の意味をもつもので、神社の社殿の変遷を考える必要があろう。

さて、本遺跡の各遺構の時期であるが、土坑は土坑内出土の土師器で、柱穴も底部出土の土師器や埋納されている土師器から、その時期を推定することが可能である。土師器は底部が箇削りのものもあれば、糸切りのものもある。糸切りも粗雑な静止糸切りと回転糸切りがあり、バラエティーに富んでいる。箇削りや、箇削りのあとを叩き調整したものなどは、12世紀後半とみてよく、粗雑な糸切り底をもつ土師器は13世紀で、一部14世紀初頭に属するものも認められる。したがって、1号土坑等の土坑群は、12世紀後半から13世紀前半とみてよく、柱穴群はその大半が13世紀である。初期須恵器の出土した柱穴は、須恵器が法面近くからの出土であることから、出土遺跡から出土した須恵器片を拾い、柱の詰め石かわりに利用したもので、柱穴そのものを5世紀中葉ないし後半まで逆上らすことは無理である。P69・P97出土の備前焼の甕の破片も、須恵

器の系統を引く12世紀後半のもので、瓦器もほぼ同じ時期のものである。

本遺跡の所在する出作は、古代の伊予国伊予郡神崎郷に属している。神崎郷には延喜式内社である伊予神社、高忍日売神社があり、本遺跡の南には恵依彌二名神社が鎮座しており、祭祀に関係する神社、遺跡が特に多い地域である。かつては恵依彌二名神社の境内が遺跡周辺まで及んでいたといわれているし、楠木神社と呼ばれる神社がこの周辺に鎮座していたともいわれている。

遺跡の所在する出作の名は、13世紀の京都の石清水八幡宮の荘園領のなかに、神崎出作保であることから、12世紀には出作保は荘園に取り込まれていたとみてよかろう。この荘園内には掘立柱の社殿が建立され、荘園内の人々の信仰の場となっていたものではなかろうか。多くの柱穴は、この社殿の建て替えや神社の変遷の結果とみることも可能である。柱穴内への土師器の埋納などは、この建て替えや変遷と密接な関わりをもっているともいえる。いずれにしても、本遺跡は古代末から中世前半にかけての、祭祀的性格の強い小掘立柱建造物群からなる遺跡であることはほぼ間違いないだろう。祭祀の対象が何であったかは知る由もないが、その一つに稻作儀礼や水靈信仰があったことは確かである。

- 註1 相田則美・森毅他『出作遺跡I』(松前町教育委員会) 1993
- 2 松岡文一「愛媛県下の磨製石剣」(『伊予史談』175・176 合併号) 1965
長井数秋「磨製石剣」(『愛媛県史』原始・古代)(愛媛県) 1982
- 3 長井数秋「松前町宝剣田遺跡出土の有柄式磨製石剣と支石墓」(『愛媛考古学』14号) 1997
- 4 杉木一正「横田遺跡」(松前町教育委員会) 1992
長井数秋・西岡信次「愛媛県松前町横田遺跡II区調査報告書」(松前町教育委員会) 1996
- 5 長井数秋・西岡信次「愛媛県松前町横田遺跡III区調査報告書」(松前町教育委員会) 1996
- 6 出作南遺跡から胴部に円孔をもつ弥生後期の大型壺棺が出土しており、出作の高市慶久氏が保管している。
- 7 後藤守一「子持勾玉の新例」(『考古学雑誌』23の) 1932
- 8 註1と同じ
- 9 長井数秋・大山正風「釜ノ口遺跡発掘調査報告書」(松山市教育委員会) 1973

第1表 検出した柱穴計測値一覧表

柱穴番号	出土場所	平面形	法量(単位cm)			出土遺物	備考
			長さ	幅	深さ		
1	1B区	円形	22	22	25	法面上土師器片	緑色片岩の川石(-10)
2	1B区	円形	28	28	14		二段掘り込み
			18	18	25		
3	1B区	円形	29	29	27		砂岩の川石(0)
4	1B区	長円形	34	22	28		
5	1B区	円形	19	19	23		
6	1B区	円形	30	30	28		
7	1B区	円形	19	19	25	土師器片	
8	1B区	円形	20	20	26	土師器片	砂岩の川石(-21)
9	1C区	長方形	40	28	26	土師器片(7)	北京隅砂岩川石あり
10	1C区	円形	20	20	24	土師器片(3)	
11	1C区	円形	16	16	26		
12	1C区	円形	16	16	32	土師器片(2)	
13	1C区	円形	33	33	25		砂岩の川石(-17)
14	1C区	円形	22	22	30		
15	1C区	円形	26	26	27	土師器片・弥生土器片	法面上に焼けた割り石
16	1C区	円形	25	25	33		砂岩の礎石(-21)
17	1C区	長円形	22	16	29		
18	1C区	長円形	24	26	24		砂岩の川石(-20)礎石
19	1C区	長円形	23	29	29	土師器片(7)	
20	1C区	円形	22	23	30	土師器片(3)	
21	1C区	長円形	29	26	17		砂岩の川石2個(-10)
22	1C区	円形	25	25	33	土師器片(4)	
23	1C区	円形	20	20	27		砂岩の川石(柱穴底)
24	1C区	長円形	20	24	31		
25	1C区	円形	30	30	38	土師器片・弥生土器片	
26	1C区	円形	26	26	29		
27	1C区	長円形	30	25	27	土師器片・瓦器片	
28	1D区	円形	23	23	31		
29	1D区	円形	24	24	36		
30	1D区	円形	22	22	33		砂岩の川石(-27)
31	2D区	長円形	32	27	34	土師器片・弥生土器片	二段掘り込み
		円形	18	18	46	緑色片岩の割り石片	
32	2D区	円形	30	30	40	土師器片	砂岩の川石8個(-13)
33	2D区	円形	23	23	30	土師器片・瓦器片	砂岩の川石(-7)
34	2D区	円形	17	17	18		
35	2D区	長円形	24	27	29	土師器片・弥生土器片	
36	2C区	円形	18	18	30	土師器片(7)	

37	2 C 区	円 形	17	17	22		小さな砂岩川石 2 個法面上
38	2 C 区	長円形	17	33	9	土師器片	小さな砂岩川石 1 個法面上
39	2 C 区	円 形	20	20	25	土師器片 (10)	
40	2 C 区	円 形	16	16	23		
41	2 C 区	長円形	17	30	20		山石 1 · 砂岩川石 4
42	2 C 区	円 形	31	31	41	土師器片 (15)	
43	2 C 区	円 形	21	21	34	土師器片 · 弥生土器片	
44	2 C 区	円 形	22	22	40	土師器片 (7)	
45	2 C 区	円 形	21	21	31	土師器片	
46	2 C 区	円 形	20	20	25	土師器片	
47	2 C 区	円 形	25	25	29		柱穴上にバラスが乗る。
48	2 C 区	長円形	29	40	29	土師器片	
49	2 C 区	円 形	23	23	27	土師器片 · 鮎の足	安山岩の山石 (-24)
50	2 C 区	長円形	17	22	44	土師器片 (3)	
51	2 C 区	円 形	21	21	14	土師器片 (3)	
52	2 C 区	円 形	13	13	13		
53	2 C 区	円 形	24	24	24	土師器碗 · 弥生土器片	土師器 (-17)
54	2 C 区	円 形	22	22	39	土師器片	
55	2 C 区	長円形	24	36	31	土師器片 · 条痕文土器片	二段掘り。安山岩川石
56	2 C 区	円 形	24	24	27	土師器 · 弥生土器 · 青磁	
57	2 C 区	円 形	17	17	19		
58	2 C 区	円 形	27	27	21		石英軹面岩 · 泥岩の川石
59	2 C 区	円 形	18	18	27		
60	2 B 区	円 形	19	19	22	土師器片 (1)	
61	2 B 区	円 形	17	17	22		
62	2 B 区	-	29	23	5	和泉砂岩の砥石	砥石を礫石に転用、石に
63	2 B 区	長円形	22	43	28		
64	2 B 区	円 形	18	18	16		砂岩の川石 (-10)
65	2 B 区	円 形	16	16	20		
66	2 B 区	円 形	24	24	32		
67	2 B 区	円 形	23	23	28	土師器片 (4)	
68	2 B 区	円 形	21	21	28	土師器片 (2)	
69	2 B 区	円 形	20	20	30	備前焼窯の破片 · 土師器片	礫盤として (-23)
70	2 B 区	円 形	20	20	21	土師器片 (4)	砂岩の川石 (0 ~ - 7)
71	2 B 区	長円形	25	40	30	土師器片	緑色片岩割り石 (-28)
72	2 B 区	長円形	30	40	30	土師器皿 (5)	花崗岩 · 安山岩 · 砂岩川石
73	2 B 区	長円形	21	30	30	土師器片	
74	2 B 区	長円形	18	30	28	土師器片 · 弥生土器片	
75	2 B 区	円 形	18	18	26	土師器片	
76	2 B 区	円 形	21	21	31	土師器碗片 (5)	
77	2 B 区	円 形	26	26	23		

78	2 A 区	円 形	20	20	38			
79	2 A 区	円 形	23	23	28	土師器片	砂岩の川石 (法面上)	
80	2 A 区	円 形	22	22	31			
81	2 A 区	円 形	18	18	30	土師器片・弥生土器片		
82	2 A 区	円 形	18	18	34			
83	2 A 区	円 形	23	23	30	須恵器片	砂岩の川石 (-30)	
84	2 A 区	長円形	30	35	17			
85	2 A 区	長円形	32	36	29	土師器皿・碗片	砂岩の川石 (法面上)	
86	2 A 区	円 形	26	26	30			
87	2 A 区	円 形	23	23	26	土師器片 (6)	砂岩の川石 3 (-5)	
88	2 A 区	円 形	24	24	15	土師器片	砂岩の川石の下から木炭片	
89	2 A 区	円 形	20	20	27			
90	3 B 区	円 形	26	26	25	須恵器片 (5)		
91	3 B 区	円 形	22	22	32	土師器片 (4)	底部から柱炭化細片	
92	3 B 区	長方形	20	28	15	土師器皿 (2)	二段掘り込み・砂岩川石 2	
		円 形	16	16	50			
93	3 B 区	円 形	28	28	43	土師器碗・皿	砂岩の川石 (鍛盤-31)	
94	3 B 区	円 形	19	19	38	柱の一部	-28-38から出土	
95	3 B 区	円 形	19	19	26			
96	3 B 区	円 形	21	21	32			
97	3 B 区	円 形	18	18	22	土師器・偏前焼・弥生土器片		
98	3 B 区	円 形	29	29	37	土師器・瓦器・弥生土器	砂岩の川石 (-20)	
99	3 B 区	円 形	21	21	40	土師器片	砂岩の川石 (-9)	
100	3 C 区	円 形	26	26	46	土師器片・磨き石	砂岩の川石 (-14)	
101	3 C 区	円 形	24	24	45			
102	3 C 区	円 形	20	20	38	土師器・瓦器・弥生土器	砂岩の川石 (-24)	
103	3 C 区	円 形	24	24	41	土師器片・須恵器片	砂岩の川石 (-5)	
104	3 C 区	円 形	20	20	50	柱の一部	-25-50から出土	
105	3 C 区	長円形	29	43	60	土師器片・弥生土器片	壁面に4個の川石 (-5)	
106	3 C 区	円 形	20	20	21	土師器碗・皿片	P17と接している	
107	3 C 区	円 形	20	20	32		砂岩の川石 (-25)	
108	3 C 区	長円形	28	38	45		砂岩の川石 (-35)	
109	3 C 区	円 形	21	21	30		砂岩の川石 (法面上)	
110	3 C 区	円 形	24	24	38		小さな川石	
111	3 C 区	円 形	19	19	38			
112	3 C 区	円 形	30	30	20			
113	3 C 区	円 形	16	16	60	土師器片・弥生土器片		
114	3 D 区	円 形	43	43	50	土師器片 (4)		
115	2 B 区	円 形	21	21	28			
116	1 B 区	円 形	20	20	35			

第2表 楠木遺跡出土遺物一覧表

番号	出土場所	種類	器種	口径	器高	底径	手 法	胎土・色調
1	1号土坑	土師器	碗	13.5	3.7	6.5	表内ヨコハケ、底部窓切り	精選・堅牢・明褐色
2	タ	タ	タ	13.5	3.5	7.0	表内ヨコハケ、底部窓切りのあと 窓削り、底部内面指ナデ凹凸あり	精選・タ・明褐色
3	タ	タ	タ	11.5	3.0	6.0	内指ナデ、底部若干凹凸、底部は 窓切りのち平行叩き	精選・タ・灰白色
4	タ	タ	タ	13.5	—	—	表内ヨコ指ナデ	精選・タ・明褐色
5	タ	タ	タ	11.0	—	—	表内ヨコハケ、薄手	精選・タ・灰褐色
6	タ	タ	タ	—	—	8.0	内回転指ナデ、底部窓切り	精選・脆い・明褐色
7	タ	タ	皿	7.2	1.5	4.8	底部糸切り	精選・脆い・明褐色
8	タ	タ	タ	6.9	1.2	4.2	底部窓切り	精選・脆い・灰褐色
9	タ	タ	タ	6.8	1.2	4.8	口縁部摘み出し、底部糸切りのち 窓削り	精選・堅牢・明褐色
10	タ	タ	タ	6.5	1.2	5.0	表底部近く叩き条痕、内荒いクシ 底部窓切り	精選・脆い・灰褐色
11	タ	タ	タ	—	—	4.5	底部窓切り	精選・脆い・灰褐色
12	タ	鉄器	劍				残存全長18.6cm、劍身幅2.2cm	
13	3号土坑	土師器	碗	11.0	3.4	5.5	体部外面窓削り、底部内面輪積み あと顯著	精選・堅牢・灰褐色
14	タ	タ	タ	11.0	—	—	表内ヨコハケ	精選・不良・明褐色
15	タ	タ	タ	11.0	—	—	表面窓削り	精選・堅牢・淡褐色
16	タ	タ	タ	11.0	—	—	表壊減、内ヨコハケ	精選・脆い・赤褐色
17	タ	タ	タ	—	—	6.0	内回転指押圧、底部窓切り	精選・不良・灰褐色
18	タ	タ	タ	—	—	5.0	内回転指ナデ	精選・堅牢・灰褐色
19	タ	タ	タ	—	—	7.0	表底部近く窓研磨、底部糸切りの あと窓削り、内指ナデ	精選・堅牢・明褐色
20	タ	タ	タ	—	—	5.5	内渦巻き状巻き上げあとを指押さ え、底部糸切り	精選・堅牢・明褐色
21	タ	青磁	臺	15.0	—	—		精選・普通・緑灰色
22	5号土坑	土師器	碗	11.0	2.8	6.7	表内ヨコハケ、底部糸切り	精選・脆い・灰白色
23	タ	タ	タ	11.0	—	—	表内不詳、微細石英粒を含む	精選・脆い・黒褐色
24	タ	タ	タ	10.0	—	—	内窓削り	精選・堅牢・灰白色
25	タ	タ	タ	11.0	—	—	表内不詳	精選・堅牢・黒褐色
26	タ	タ	タ	11.0	—	—	内ベンガラ塗布	精選・脆い・紅褐色
27	タ	タ	タ	—	—	8.7	表内不詳、底部窓切り	精選・脆い・灰褐色
28	タ	タ	タ	—	—	6.5	表内不詳、底部糸切り、微細石英粒	精選・堅牢・明褐色
29	タ	タ	タ	—	—	6.5	表内不詳、底部糸切り	精選・脆い・灰白色
30	タ	タ	タ	—	—	6.8	表内ヨコハケ、底部糸切り	精選・堅牢・茶褐色
31	タ	タ	皿	6.5	1.0	5.4	表内ヨコハケ、底部糸切り	精選・脆い・灰白色

32	P 30	須恵器	壺	—	—	—	器壁1.1cm、上胴部に4本沈線が2.5cm間隔で2条、内面櫛の上を指圧	精選・堅牢・青褐色
33	1号土器	土師器	碗	11.0	—	—	表内ヨコハケ	精選・脆い・白褐色
34	タ	タ	タ	11.0	—	—	表内不詳	精選・脆い・白褐色
35	タ	タ	タ	11.0	—	—	薄手0.2cm、内ヨコハケ	精選・脆い・白褐色
36	タ	タ	タ	11.0	—	—	口縁先端部立ち上がる、0.2cmと薄手、内荒いヨコハケ	精選・脆い・白褐色
37	タ	タ	皿	6.6	—	—	口縁下表面指ナデ顕著	精選・脆い・茶褐色
38	タ	タ	碗	—	—	7.0	表内磨滅、底部不明	精選・普通・明褐色
39	タ	タ	タ	—	—	7.0	底部内輪積み巻き上げ痕顕著、底部糸切り	精選・普通・灰白色
40	タ	タ	タ	—	—	4.8	表内磨滅、底部糸切り	精選・普通・明褐色
41	タ	タ	タ	—	—	6.0	表内不詳、高さ0.25cmの高台あり	精選・堅牢・淡褐色
42	P 1	タ	タ	11.0	—	—	口縁部やや内弯、口縁下に3本の細沈線	精選・脆い・茶褐色
43	タ	タ	タ	—	—	8.0	表ヨコハケ、内範押さえとヨコ指ナデ、底部範切り	精選・堅牢・明褐色
44	タ	タ	タ	—	—	6.8	底部内ヨコ指ナデ、底部糸切り	精選・堅牢・褐色
45	タ	タ	タ	—	—	6.5	底部糸切り、微細石英粒を含む	精選・普通・淡褐色
46	P 1の南20	タ	鼎	—	—	—	残存最大径2cm、最小径1.3cm、残存長4cm、花崗岩粒を含む	精選・堅牢・赤褐色
47	P 7	タ	皿	6.4	1.3	4.9	表内ヨコハケ、底部と体部の境不明瞭、底部糸切り	精選・普通・明褐色
48	タ	タ	碗	13.5	—	—	器壁0.4cmと厚手、微細頁岩粒	精選・脆い・白褐色
49	P 8	タ	タ	11.0	—	—	表内磨滅、器壁0.35cm	精選・脆い・白褐色
50	タ	タ	タ	11.0	—	—	口縁端尖りぎみ、口縁下表内面に低い稜あり	精選・普通・灰褐色
51	タ	タ	皿	6.0	1.2	4.6	底部と体部の境曲線、底部糸切り	精選・脆い・灰褐色
52	P 9	タ	碗	11.0	—	—	口縁部内面に指圧による浅い段あり、器壁0.23cmと薄手	精選・堅牢・明褐色
53	タ	タ	タ	—	—	7.0	底部糸切り	精選・脆い・灰褐色
54	P 10	タ	タ	11.0	—	—	内面ヨコハケ、器壁0.35cm	精選・堅牢・白褐色
55	P 12	タ	タ	11.0	—	—	口縁部直立、口縁端尖りぎみ	精選・堅牢・黒褐色
56	タ	タ	タ	—	—	6.0	底部表面施刻み目、内面平行叩き 器壁0.55cmと厚手、底部糸切り	精選・堅牢・淡褐色
57	P 15	タ	タ	13.0	—	—	表内ヨコハケ、一部帯状に紅褐色 器壁0.35cm	精選・堅牢・明褐色
58	タ	タ	タ	13.0	—	—	表内面布ナデ、器壁0.35cm	精選・堅牢・淡褐色
59	タ	タ	タ	13.0	—	—	表面布ナデ、内ヨコ指ナデ	精選・不良・赤褐色
60	タ	タ	タ	—	—	5.8	底部糸切り	精選・堅牢・明褐色
61	P 19	タ	タ	11.0	—	—	器壁0.2cmと薄手	精選・脆い・赤褐色

62	夕	夕	夕	-	-	7.0	底部表面巻き上げ痕あり、底部不詳、微細な頁岩・石英粒を含む	精選・堅牢・明褐色
63	P20	夕	夕	-	-	7.0	底部内面に巻き上げ痕あり、底部糸切り底	精選・堅牢・茶褐色
64	P22	夕	夕	11.0	-	-	内面ヨコ指ナデ、器壁0.35~0.40cm	精選・堅牢・褐色
65	P25	夕	碗	-	-	6.5	底部内面に輪積み巻き上げ痕、底部糸切り、底部と体部の境不明瞭	精選・堅牢・茶褐色
66	夕	夕	碗	-	-	5.0	底部内面輪積み巻き上げ上をヨコ指ナデで丁寧にナデ、底部糸切り	精選・堅牢・明褐色
67	P27	夕	夕	11.0	-	-	器壁0.25cmとやや薄手、口縁端尖りぎみ	精選・普通・白褐色
68	夕	夕	皿	6.2	1.1	5.0	表内面磨滅	精選・脆い・赤褐色
69	P31	夕	碗	-	-	6.5	表内面磨滅、底部糸切り	精選・普通・灰褐色
70	夕	夕	夕	-	-	6.8	表内面磨滅、底部表面に細い沈線 底部糸切り 底部と体部の境稜有	精選・普通・灰褐色
71	夕	夕	夕	-	-	7.5	表面黒い煤付着、底部糸切り	精選・堅牢・灰褐色
72	P33	夕	夕	13.0	-	-	口縁部斜め直線外反、器壁0.25cm	精選・脆い・茶褐色
73	夕	夕	夕	-	-	7.0	三角形の高さ0.35cmの高台をもつ	精選・脆い・茶褐色
74	P35	夕	夕	9.0	-	-	器壁0.25cmと薄手、表内ハケ	精選・脆い・灰白色
75	夕	弥生土器	鉢	-	-	-	口縁端水平、表面横条痕文、内面 縱条痕文、胎土中に金雲母	堅牢・赤褐色
76	P36	土器師	碗	-	-	6.5	体部下に回転による皺あり、底部 糸切り	精選・堅牢・灰褐色
77	P38	夕	夕	12.0	-	-	表面回転籠あと、内面ヨコハケ、 器壁0.4cmと厚手	精選・堅牢・灰褐色
78	P39	夕	夕	13.0	4.3	-	口縁端丸く納める、表面ハケ、器 壁0.6~0.7cmと厚手	精選・堅牢・白褐色
79	夕	瓦 器	夕	16.0	-	-	底部近くの表面指圧痕が連続、口 縁下に竪による凹み、黒色研磨	精選・堅牢・黒灰色
80	夕	土師器	夕	--	-	7.0	底部やや垂れぎみで籠切り	精選・脆い・褐色
81	P43	夕	夕	11.0	-	-	表内面磨滅、器壁0.4~0.45cm	精選・脆い・灰褐色
82	P49	夕	鼎	-	-	-	残存長5.5cm、中央部径2.5cm、胎 土中に石英粒を多く含む	堅牢・濃茶色
83	P50	夕	碗	-	-	7.2	底部糸切り	精選・堅牢・灰褐色
84	P53	夕	夕	11.5	3.0	7.0	完形品、表面黒斑、内面籠割りと 指ナデ、底部籠切りの上平行叩き	精選・堅牢・灰白色
85	夕	夕	夕	12.5	-	-	内面黒く煤付着、器壁0.4cm	精選・堅牢・明褐色
86	夕	夕	夕	11.0	-	-	口縁部のみ肥厚、表内面ともヨコ ハケ	精選・堅牢・白褐色

87	タ	タ	タ	11.0	-	-	口縁端の指幅部分が外反、器壁は0.2cmと薄く、内面ヨコハケ	精選・堅牢・白褐色
88	タ	タ	タ	12.5	-	-	口縁端が心もち直立、器壁0.2cm	精選・脆い・明褐色
89	タ	タ	皿	6.5	1.2	5.2	口縁部摘み出し、厚さは0.4cm	精選・堅牢・黒灰色
90	タ	弥生土器	甕	-	-	-	甕の胴部の破片、磨滅痕なく、表面凹凸煤付着、内面指ナデ	堅牢・黒褐色
91	P54	土師器	碗	-	-	7.0	表面内面磨滅、底部糸切り	精選・脆い・灰褐色
92	P56	タ	タ	11.0	-	-	器壁0.23~0.25cmと薄手	精選・脆い・赤褐色
93	タ	タ	タ	11.0	-	-	器壁0.23~0.25cmと薄手	精選・脆い・灰褐色
94	タ	タ	タ	-	-	7.0	器壁0.23~0.25cmと薄手、底部糸切り	精選・脆い・灰白色
95	P57	タ	タ	-	-	7.0	底部に段あり、底部糸切り	精選・脆い・灰褐色
96	P67	タ	タ	11.0	-	-	口縁部斜め直線的外反、表面クシノ上をハケ、胎土中に頁岩粒	精選・堅牢・明褐色
97	P68	タ	タ	-	-	6.0	内面指ナデ、底部箇切りのあと箇調整、底部と体部の境明瞭	精選・堅牢・明褐色
98	タ	タ	タ	-	-	6.5	表面箇研磨、底部箇切りのあとを平行叩き	精選・堅牢・灰褐色
99	P69	タ	タ	11.0	-	-	口縁部の表内面輪積み巻き上げの凹凸あり	精選・普通・明褐色
100	P72	タ	タ	11.0	-	-	口縁部直立ぎみに内弯、器壁0.18cmと特に薄い	精選・堅牢・明褐色
101	タ	タ	タ	11.0	-	-	口縁下表面に細いクシ状沈線、表面ハケ調整	精選・堅牢・黒褐色
102	タ	タ	タ	11.0	-	-	口縁部やや内弯ぎみ、表面内面箇削り、のちヨコハケ、内面ヨコハケ	精選・堅牢・明褐色
103	タ	タ	タ	-	-	6.0	表面ヨコハケ、内面指ナデ、底部箇切りで凹凸あり	精選・堅牢・淡褐色
104	タ	タ	タ	-	-	7.0	底部と体部の境丸み、内面指ナデ	精選・堅牢・黒灰色
105	P47	タ	タ	11.0	-	-	口縁部斜め直線的外反、内面ヨコ指ナデの上を一部箇研磨	精選・堅牢・灰褐色
106	P76	弥生土器	甕	21.0	-	-	口縁部直立、外側重れ下がり肥厚し凸带状、下部黒く煤付着	堅牢・暗褐色
107	P58	石器	石錐	-	-	-	残存全長8cm、幅9.5cm、厚さ3.7cmの石英粗面岩、円孔が一部残存	灰褐色
108	P69	陶器	-	-	-	-	幅10cm、高さ10.5cm、厚さ0.8cmの備前焼の甕の胴部片	堅牢・鉄錆色
109	P76	土師器	碗	13.0	-	-	口縁部漏斗状、表面に輪積みのあととの凹凸あり	精選・堅牢・灰褐色
110	タ	タ	皿	-	-	4.5	底部内面指ナデ、底部糸切り	精選・堅牢・灰褐色

111	P 81	タ	碗	13.0	—	—	口縁部開きぎみ外反、口縁端立ち上がり尖っている、内面ヨコハケ	精選・堅牢・明褐色
112	タ	タ	タ	11.0	—	—	口縁部布ビキ	精選・堅牢・明褐色
113	タ	タ	タ	—	—	8.0	底部と体部の境曲線的、底部範切り、微細石英粒を含む	精選・脆い・白褐色
114	P 85	タ	タ	13.0	—	—	口縁部緩やかに内湾、表面範削り、器壁0.25cm	精選・堅牢・明褐色
115	タ	タ	タ	13.0	—	—	体部から口縁部にかけてはわずかに内湾、表面ヨコハケ、内指ナデ	精選・普通・明褐色
116	タ	タ	タ	13.0	—	—	体部から口縁部やや内湾、表内面ハケ、石英・砂岩粒を含む	精選・堅牢・暗褐色
117	タ	タ	皿	6.0	1.0	5.0	口縁部摘み出し、表面ヨコ指ナデ底部糸切り	精選・堅牢・明褐色
118	タ	タ	碗	—	—	7.0	内面横指ナデ、底部範切りのあと範削り	精選・脆い・鼠色
119	P 87	タ	タ	13.0	3.5	8.0	口縁部斜め直線的立ち上がり、口縁端内湾気味、内部に巻き上げ痕	精選・堅牢・明褐色
120	タ	タ	タ	—	—	7.5	底部内面巻き上げ痕、指ナデ、底部糸切りのあとを範切り落とし	精選・堅牢・明褐色
121	P 88	タ	タ	11.0	—	—	口縁部の立ち上がり心もち内湾、木炭片と一緒に出土、表範押当て	精選・堅牢・明褐色
122	P 90	タ	タ	11.0	—	—	口縁部斜め外反し、心もち内湾ぎみ、表内面横指ナデ	精選・脆い・明褐色
123	タ	タ	タ	11.0	—	—	口縁部斜め直線的に外反、表面荒いクシ	精選・脆い・茶褐色
124	タ	タ	タ	11.0	—	—	口縁部の立ち上がりやや内湾、口縁端尖る、表内面ヨコハケ	精選・堅牢・明褐色
125	須恵器	壺	—	—	—	—	長さ21、幅11、厚さ1.3cmの破片、表面格子目状叩き、初期須恵器	軟質・青灰色
126	タ	タ	タ	—	—	—	長さ10、幅7、厚さ1.6cm、格子目状叩き、内当て道具跡をクシで消す	軟質・青灰色
127	P 91	土師器	碗	11.0	—	—	口縁部心もち内湾、表内面ヨコハケ	精選・脆い・明褐色
128	P 92	タ	タ	13.0	3.5	6.0	口縁部立ち上がり斜め外反、表内面横指ナデ、底部糸切り	精選・堅牢・白灰色
129	タ	タ	タ	11.5	3.0	8.0	口縁部斜め直線的外反、表面指ナデ、底部範切りのあと平行叩き	精選・堅牢・灰褐色
130	タ	タ	タ	11.0	2.8	6.0	口縁部斜め直線的、表面横指ナデ、底部糸切りのあと範削り	精選・堅牢・白褐色
131	P 93	タ	タ	11.5	2.6	7.0	口縁部斜め直線的、口縁端内湾ぎ	精選・普通・灰白色

							み、底部内輪積み痕、底部糸切り	
132	タ	タ	タ	12.0	—	—	口縁部等131と同じ	精選・脆い・明褐色
133	タ	タ	タ	11.5	—	—	口縁部131と同じ、口縁部内面や や肥厚	精選・脆い・灰褐色
134	P94	タ	タ	12.0	—	—	器高の比較的高い続、表内面磨滅	精選・脆い・灰白色
135	P98	瓦器	タ	11.0	—	—	口縁部斜め直線的外反、口縁下1 cmで内反	精選・堅牢・黒灰色
136	タ	土師器	タ	11.0	—	—	口縁部斜め直線的に開き表内磨滅	精選・堅牢・灰褐色
137	タ	タ	タ	—	—	7.0	微繊石英粒を含む、底部糸切り	精選・脆い・灰白色
138	タ	須恵器	脚台	—	—	—	脚径17.5cm、脚付壺の脚で脚端が 爪先立つ、表内面箇研磨	堅牢・青灰色
139	タ	タ	壺	—	—	—	表面格子目叩き、内面同心円當て 具あとを丁寧に指ナデで消す	軟質・黒灰色
140	タ	タ	タ	—	—	—	表内面指ナデ、初期須恵器	軟質・青灰色
141	P99	土師器	碗	11.0	—	—	表面ヨコハケ	精選・堅牢・灰褐色
142	P100	タ	タ	11.0	—	—	表内面磨滅	精選・脆い・赤褐色
143	タ	タ	タ	—	—	7.0	底部と体部の境角あり明瞭、底部 箇切り	精選・脆い・灰白色
144	タ	タ	タ	—	—	7.0	底部と体部の境角あり明瞭、底部 糸切り	精選・脆い・白褐色
145	タ	タ	タ	—	—	7.0	底部と体部の境角あり明瞭、底部 糸切り、底部内面輪積みあと顯著	精選・脆い・暗褐色
146	タ	土器	磨石	—	—	—	残存長3.3cm、幅2.5cm、厚さ1.2cm の断面長円形、全面研磨、砂岩製	
147	P102	土師器	碗	12.5	3.0	6.5	口縁部斜め直線的やや内弯、底部 内輪積み、底部糸切りのち箇切り	精選・堅牢・灰褐色
148	タ	磁器	—	15.0	—	—	口縁部緑褐色の釉薬付着	
149	タ	上師器	碗	12.5	—	—	やや浅めの碗口縁部、器壁薄手	精選・脆い・明褐色
150	タ	瓦器	タ	—	—	6.0	底部糸切り	精選・脆い・灰褐色
151	タ	土師器	タ	—	—	7.0	底部内面輪積みあと、底部糸切り	精選・堅牢・明褐色
152	P103	タ	タ	12.0	—	—	斜め直線的に開き、口縁端更に開 らく、輪積みあと残存	精選・堅牢・黒灰色
153	タ	タ	タ	12.0	—	—	口縁部漏斗状外反、表面わずかに 凹凸、内面指ナデ	精選・堅牢・明褐色
154	タ	タ	タ	—	—	7.0	表内面磨滅、開き直線的、底部糸 切り	精選・脆い・灰白色
155	タ	タ	タ	—	—	6.7	底部と体部境曲線的、底部糸切り	精選・堅牢・灰白色
156	タ	須恵器	壺	—	—	—	壺の下胴部、表面平行叩き、一部 格子目状、内面タタキをクシ消し	軟質・青灰色

157	P 105	弥生土器	壺	22.0	—	—	口縁部に三角状貼付凸帯、内面範研磨、微細石英と金雲母	堅牢・茶褐色
158	♦	土師器	碗	11.0	—	—	底部近く弯曲、表面ヨコハケ	精選・脆い・明褐色
159	♦	タ	タ	—	—	8.0	底部内面輪積み痕あり、底部糸切りのあとを笠落とし	精選・堅牢・明褐色
160	♦	タ	タ	—	—	6.5	底部内面輪積み痕、底部糸切り	精選・普通・灰褐色
161	P 107	タ	タ	—	—	6.6	底部上にわずかな段、内面押圧痕あり、底部範切り	精選・堅牢・淡褐色
162	♦	タ	皿	7.5	0.9	6.0	口縁部摘み出し、底部糸切り	精選・普通・明褐色
163	♦	タ	碗	11.0	—	—	表内面磨滅	精選・脆い・明褐色
164	♦	タ	タ	—	—	6.5	底部と体部の境曲線的、底部内面輪積み痕、底部糸切り	精選・堅牢・明褐色
165	P 113	タ	タ	—	—	7.0	底部と体部の境曲線的、底部内面輪積み痕、底糸切り	精選・脆い・灰白色
166	♦	タ	タ	11.0	—	—	表面ハケ	精選・堅牢・赤褐色
167	P 114	タ	タ	11.0	—	—	表内面磨滅	精選・脆い・明褐色
168	2層上面	タ	タ	12.5	—	—	体部半球形	精選・普通・白褐色
169	♦	タ	タ	13.0	—	—	口縁部漏斗状に開く、表内面範削り	精選・堅牢・白褐色
170	♦	タ	タ	13.0	—	—	口縁部やや肥厚、表内面範削りの上をヨコ指ナデ	精選・堅牢・灰褐色
171	♦	タ	タ	13.0	—	—	表内面磨滅	精選・堅牢・明褐色
172	♦	タ	タ	13.0	—	—	器壁0.2cmと薄手、表面範研磨、内面ヨコハケ	精選・堅牢・明褐色
173	♦	タ	タ	11.0	—	—	器壁0.25cm、表面指ナデ、内面ヨコハケ	精選・堅牢・明褐色
174	♦	タ	タ	—	—	7.0	底部と体部の境角度有、表面指ナデ、底部糸切りのあとを範削り	精選・堅牢・白褐色
175	♦	タ	タ	—	—	6.0	底辺と体部の境曲線的、底部範切り、微細石英粒を若干含む	精選・普通・褐色
176	♦	タ	タ	—	—	7.0	底部と体部の境角度有、底部内面輪積み跡、底部範切りのあと叩き	精選・堅牢・明褐色
177	♦	タ	タ	—	—	7.0	底部と体部の境は角度有、底部糸切り	精選・脆い・明褐色
178	♦	タ	皿	—	—	5.0	口縁部摘み出し、器壁0.25cm、底部糸切り	精選・脆い・白褐色
179	♦	タ	タ	6.8	1.1	4.8	口縁部薄く摘み出し整形、表面範削り、底部糸切り	精選・堅牢・灰褐色
180	♦	タ	タ	6.3	1.2	5.0	口縁部摘み出し、底部範切り	精選・脆い・淡褐色
181	♦	タ	タ	6.0	0.9	5.0	口縁部摘み出し厚い、底部糸切り	精選・脆い・褐色